神代物語

328
245

328-245

神代物語

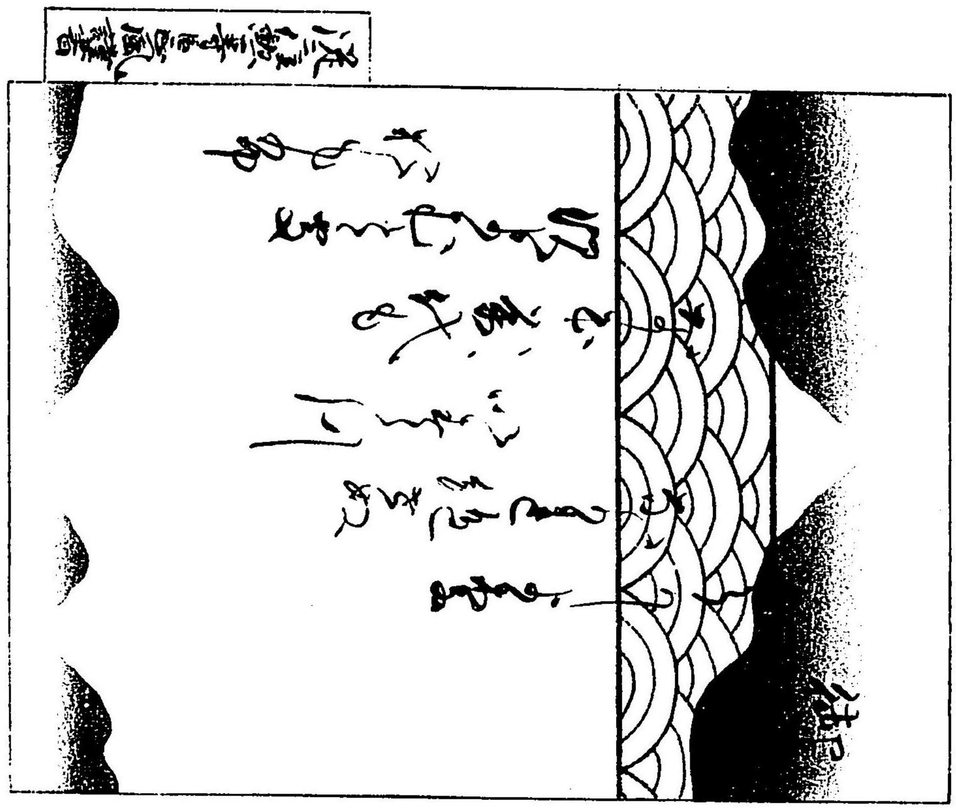
文學博士田中義成題

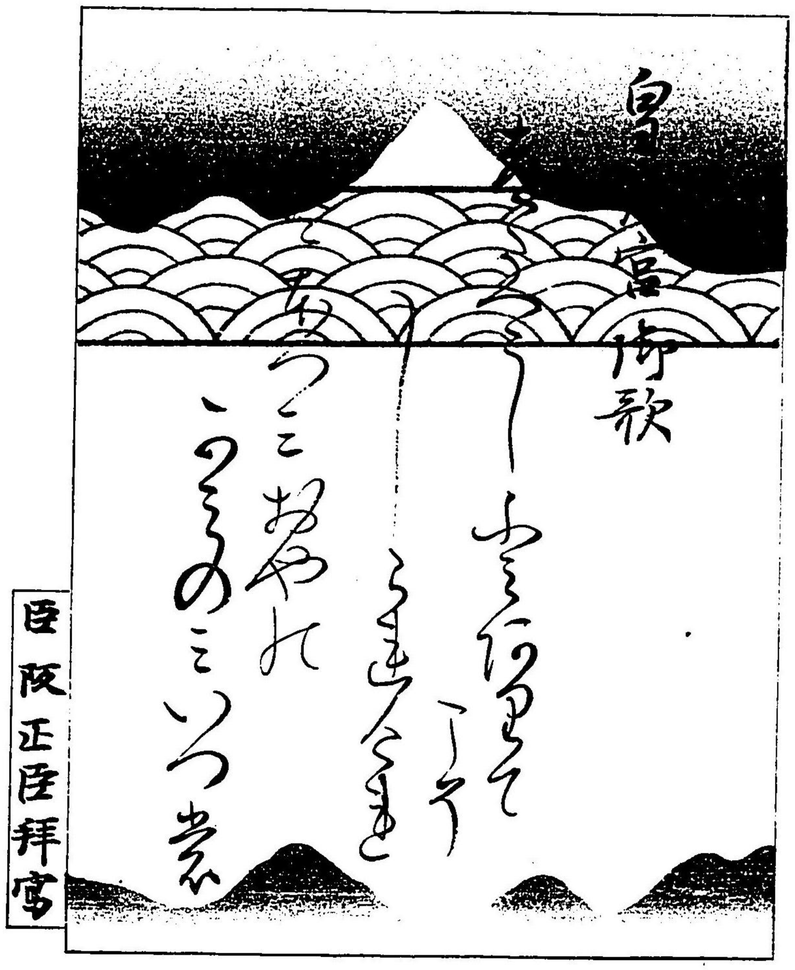
明治
43. 5. 7
內交

君傳天統

臣皆神胤

德川光圀

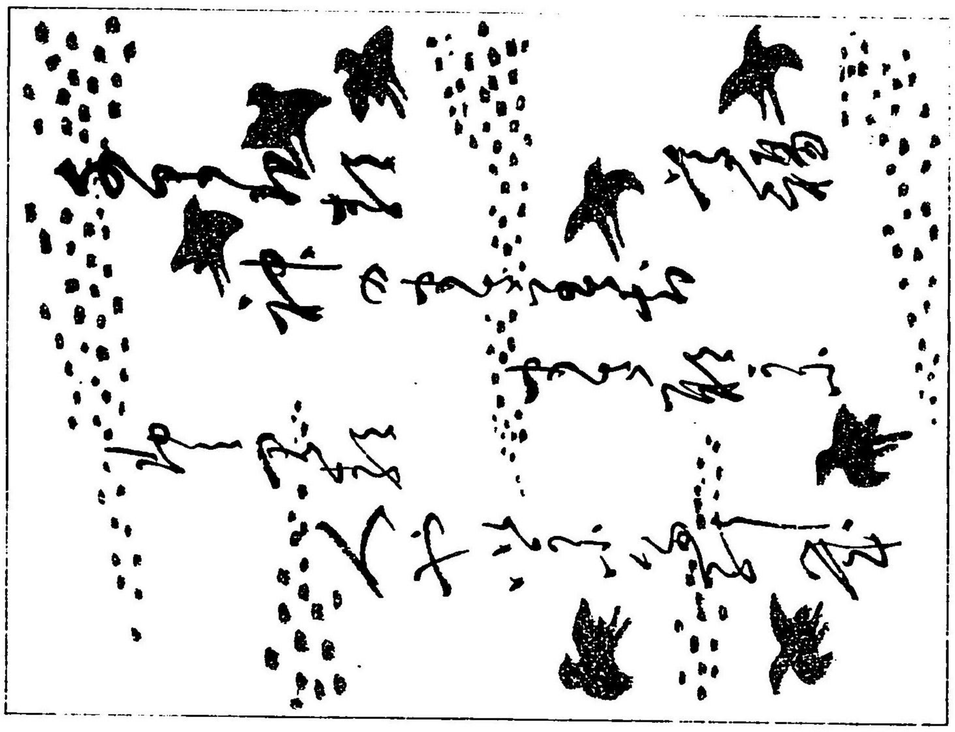



皇宮御歌
臣阪正臣拜寫

至

全

正三位和光堂



神代物語

東京帝國大學文科大學教授文學博士田中義成先生　題簽
御　製　宮內省御歌所々長男爵高崎正風閣下　揮毫
皇后宮御歌　宮內省御歌所主事阪正臣先生　揮毫
皇太神宮大宮司子爵三室戸和光閣下　題字
前司法大臣貴族院議員男爵千家尊福閣下　題詠
貴族院議員男爵紀俊秀閣下　序文
內務省神社局長法學博士井上友一先生　序文
東京帝國大學文科大學教授文學博士三上參次先生　序文

目次

一　天地創始……一
二　破馭盧島……七
三　黄泉平阪……一三
四　檍原祓除……二〇
五　天地震動……二五
六　天岩窟隱……三一
七　曾尸茂梨……四一
八　八岐大蛇……四七
九　因幡素兎……五四
一〇　國作大神……六五
一一　中國平定……七一
一二　出雲大社……八〇
一三　天孫降臨……八七
一四　人命夭折……九六
一五　海幸山幸……一〇一
一六　高千穗宮……一一〇

附錄

皇太神宮正遷宮拜觀の記……一—二五

挿畫

口繪　奉遷勅使御祭文を捧ぐ
第一圖　諸冉二神天浮橋に立たせ給ふ
第二圖　天照大神の男裝
第三圖　天岩窟前の舞樂
第四圖　八岐大蛇
第五圖　武甕槌經津主神順逆を說く
第六圖　猿田彦命の奉迎
第七圖　天忍人命蟹を掃ふ
第八圖　皇太神宮宮殿
第九圖　皇大神宮正遷宮

序

坤輿邦國を爲すもの多しと雖、數千年來毫も渝らざる歷史と國體とを維持し、皇統連綿として萬世一系、今、猶、古の如きもの、我日本を措きて、又他に之を求むべからず。夫れ國史は我烈聖の治績我祖先の功勳にして、我臣民之を繙かば、誰か祖先の威風を顯彰せんと感奮せざるものあらんや。而して、國史は、實に邃古、諸冉二神大八州經營に剏り我國民の忠孝・勇悍・清廉・貞操・文雅・好尙等、歷々其由りて來る所を見るべきものあり。然るに、記紀の文、全然漢文によりて表出せられ、且文辭古雅にして

今人の容易に解すべき所にあらざるは、憾むべき至りとす。佐藤學士は、嘗我南紀に寓すること數年、其間鋭意皇基發祥の遺跡を尋ね、神代史の闡明に從事せしや久し。頃者、神代物語を著し、携へ來り余に示して曰はく、世人神代史を目して荒誕不稽の書となし、棄てゝ顧みずと雖、其說く所、一として我祖先の事蹟にあらずといふことなし。見よ、天子は、實に日神の裔に在して、其他官國幣縣鄕村社に祭祀を享くるもの、孰も大古に偉功を建てたる神祇、又は其子孫にあらざるはなきなり。而して、其事の荒誕不稽と思はるゝものも、能く之を研究する時は、或は寓意、或は事實の誤認はあれど、依りて以て其當時の眞相を髣髴として覗ふを得るなり。今余の此著あるは、唯我神代史を傳來のまゝに平易に叙述して、其通曉に便ならしめ、我上古史は、決して痴人夢を說くが如きものにあらざるを知らしめんが爲のみ。君は、實にこれ神皇產靈命五世の裔、天道根命の後にして、世々日前國懸宮に事へ、出雲國造家と我國最古の舊家なり。何ぞ一言を此に序し、以て諸神の裔、今歷々として、現存するの證とせざると。余や、嘗神社の宗教視せらるゝを慨して、神職を小弟に讓り、身を政界に投じ、以て微力を神

社局の獨立に盡くせり。而かも、居常或は祖神の威德を辱しむるなきやを恐れ、造次顚沛にも祖神を念はざるの日なし。而して古代の眞相を發して、神德の威靈を昭にせる學士の書、今や世に出づるを見て、邦人之に由りて我神代史の梗概を知り、我建國の深厚なるを解し、或は祖先の功勳に感奮し、或は風俗の淵源を稽へ、史學に、教訓に、其裨益する所尠少ならざるべきを想ひ、怡悅禁じ難きものあり。殊に我兄弟は多年學士の交を辱うする者、今此有益なる著述あるを聞く。豈に欣然として一言を題せざるを得んや。聊か所懷を陳べて學士の請に應ずと云ふのみ。

紀伊國造天道根命第七十八代孫

明治四十二年十二月　　男爵　紀　俊秀

天の戸の明けし月日の變らぬは神代ながらの光なりけり　後醍醐天皇

名草山とるや榊のつきもせず神わざ繁き日の隈の宮　紀俊文

序

我神代史が、泰西諸國の神話と、其撰を異にするものあるは、數々專門の諸家より、之を耳にする所なり。國土經營の精神、勇邁卓犖の氣象、推讓協力の美德は更なり、純潔節操を守るの風もあり、厚生利用を尙ふの道も具はりて、天地萬物、未だ全く闢けざる上古にありて、已に業に人事の善美、處世の諸德が、自ら諸神の性格に、之を見ることを得ては、窃に我國體國風の本源は、其由て來る所深く且遠きを感ぜずんばあらず。頃者、伊勢正遷宮の典に參列するの光榮を擔ふや、其序を以て、三重縣神職

大會に臨み、某宮司の講話を聽き、聊か感悟したることあり。其說の一端に言はく、人の世に處し事に當る、正に神性を移して之を躬行することを得ば足れり。所謂神性とは、忠愛・清潔・義勇・推讓等の諸德なり。神の名に於て、自ら是等の神性を代表せるは、古傳古史が明に之を示す所なりと。所謂神性を人格に移すの一事は、祖神崇敬の本意にも適ひ、又其說話としては、頗人心に入り易きの方法たることを覺れり。我神代史の甚だ尊ぶへく、又學ぶべきもの多きは、則此一事に依りても明かなり。知友佐藤文學士は、國史の專攻家にして、近來殊に其力を我古史の研鑽に致せり。今我國民の爲に神代史を平易に叙述し、以て我古史の光輝を發揚せんことに力めらる。予は其篤學人に邁ぐるゝものあるに敬服し、其需に應じて、聊鄙懷を述べ、以て之が序に代ふ。

明治四十二年十二月

法學博士　井上友一

今も尙久しく守れ千早ふる神のみづかき世々を重ねむ　龜山天皇

榊葉に祝ひて懸けし白木綿の靡くや神の心なるらむ　千種有功

序

神代は遼遠にして、其事蹟盡く之を明にすべからず。故に大日本史・本朝通鑑以下の諸史、筆を神武天皇に起すもの多し。然りと雖、天照大神が、神器を皇孫瓊々杵尊に授けて、豐葦原瑞穗國に降し給ひしより、天壤無窮の皇運茲に開け、日本帝國の基礎茲に成る。其事神代史中に載せられ、彰明較著また疑を容るべからず。蓋し我國に神代史あるは、即ち我建國の悠久なるを證し、又我國固有の人情・風俗・政治・文學等の在るを示す所以にして、我國民の誇とすべき所なり。若し神代史を究めずんば、國

史を解し、國體を知らんとするも、其淵底に達する能はざるべし。

神代史の忽にすべからざること、夫れ是の如く、隨ひて古來之が解釋を試むる者頗多し。本居宣長の古事記傳の如きに至りては、闡幽顯微眞に稀世の大業なり。されども、其書浩瀚にして、普く國民の讀む所となる能はざるを遺憾とす。之に加ふるに、當時の古學者は動もすれば神書とし、經典として、神代史を觀るが故に、文字に拘泥して、眼光紙背に徹せざるの憾あり。又近時の古學者は、泰西科學の上より神代史の說明を試み、着々其步を進むと雖、亦間々私智に馳せ、古傳を輕視するの嫌なしとせず。而して、高天原は、依然として雲披き難く、高千穗峰は、舊に仍りて霧深く罩みたり。神代史の眞相猶容易に知る能はざるなり。

余常に謂へらく、苟も一國に繫屬する者は、其國の歷史を知るの義務を有す。況んや、萬世一系の帝室を戴き、世界無比の國體を有する我國民に於てをや。されば、國民として、先づ國史の發端なる祖先の傳說を解せしむること、是れまづ急務なりとす。然るに、記紀の正文は難解にして、一般人士の繙閱に便ならず、故に之を通俗の文

章に譯すること、最も必用の事に屬すと。頃者、佐藤學士神代物語を著し、序を余に求めらる。學士の意は、此書により、國民をして、我神代史の梗概を知らしめ、因て以て我國には尊重すべき古傳說あり、隨つて、我國特有の人情・風俗・政治・文學等の在るありて、皇室の御由緒、帝國の淵源、三種の神器、氏族の蕃衍、神社の性質等、皆據る所あり、神代史の決して空漠にして、徒らに、神怪を說き、妄りに不可思議を述ぶる者にあらざるを悟らしめ、延いては、神代史に興味を感じて、他日學者として之を研鑽するの端を發かしめんとするにありと。是れ全然余の意を得たる者なり。今此書を見るに、行文最も流暢平易にして、單に古傳說として之を卒讀するも、亦津々たる趣味あるを覺ゆ。而して其文章の流暢平易なるは、是れ皆皇室の尊嚴、國體の優美を說明する所以のものなれば、洵に國民をして、神代史の門戶を窺はしめ、以て國史を知るべき義務を果さしむる良著と謂ふべし。此類の書は、余の最も推奬するに憚らざるところなり。乃ち感ずる所を記して以て序となす。

明治四十二年十二月　文學博士　三上參次識す

行末を思ふも久し天つ社國つ社のあらむ限は　桜村上天皇

天地の神のたもてる國なればときはかきはに君ぞ榮えむ　藤原冬平

神代物語

文學士　佐藤小吉著

一　天地創始

我國の歴史にて、神代と云ふのは、神武天皇以前の御世を稱へ申すのである。さて、此神代とは、何の頃より始まつたのでありませうか。年代頗悠久にして明かではありませんが、現在の我帝國の基礎既に置かれ、寶祚の隆えまさんこと、我民俗の敦厚にして、質撲なること、且は天性忠孝の志厚く、勇氣に富めることなど、すべて、此神代に芽を萠したのであります。世の諺に、「三歳の魂百まで」といつて、人

の性行を、略、其幼時の有様より、推定するやうに、一國の狀態も、其太古の事蹟より、判定されるものであります。國を人に譬へんに、我神代は、現今の帝國の三歳であります。能く此三歳時代の日本を觀察するならば、やがて我國の今日あることを、なるほどと、頷かれるでせう。換言すれば、我國の政體・法律・文學・宗教・人情・風俗等、皆此神代より源を發し、流れ流れて、浩々漾々たる、今日の盛觀を呈した者であります。勿論、此神代の事蹟は、眞の歴史ではありませんが、此神代を知らなければ、我國の歴史を十分に解くことが出來ません。之を西洋のことで考へて見ますと、歐米文化の源泉たる、希臘の國には、遠き年代に神話時代があつて、人々が、此神話を知らなければ、希臘史は十分に知ることが出來ないと云はれて居ります。我神代は丁度希臘の神話時代のやうであります。そこで吾は、我神代の傳説を物語つて、我國民諸君の一顧を煩し、眞正に、我歴史の了解されんことを望まうと思ひます。

天神國社をいはひてぞ我葦原の國は治る　後宇多天皇
天地の開け初めける神代より絶えぬ日嗣の末ぞ久しき　藤原冬平
國ごとに君はあれども高ひかる我日の御子ぞやもの大君　本居宣長

天地の開け初し時の狀態は如何でありましたらう。世界の國々には、夫々、古い傳説がありますが、そも〳〵、我國では何と云ひ傳へてをりますか。先づ、今より一千三百年前に成れる、勅撰の日本紀に

據ると、古、天地が未分れず、陰陽が未分れざるとき、渾沌たることが恰、鷄の卵のやうでありました。其中に、自然に天地の氣を萠し、清み て明かなる者は、上に棚引き昇りて天となり、重くして濁れる者は、下に沈み滯りて地となりました。一體透明の氣の、昇り騰るのは易く混濁の氣の凝り結れるのは難くあります。これ、天先づなりて、地が後に定れる道理であります。然して後、神が其中に生まれさせられたとあります。されど、此傳説は、全く、我國のものではなくて、淮南子・三五略記等いふ漢籍より、都合よき文字を採つて來て、支那大古の傳説を借り、そして、我國の天地創造説を説明した者であると云ふことであります。

又、日本紀より、少しく前になれる古事記には、かゝる文飾が少もなく、唯單に天地の初め、高天原に成れる神に、天御中主神・高皇産靈神・神皇産靈神がありました。時に國土が未稚く、恰水上に浮かんでをる脂や水月の樣に、虛空にふら〳〵漂うて、葦の若芽の如くに、萠え騰れる物に因りて、成れる神を、可美葦牙彦舅神と申し、其次に天常立神が成りました。以上の五神を、別天神と申すとあります。古來の學者は、かゝる質撲なる者こそ、眞の我古傳説であるべきものであると云つてをります。以下述べます事蹟は、古事記を土臺として日本紀や、其他色々の書物を參考したのであります。

別天神の次に、國常立神・豐雲野神、後に男女一對の、埿土煮・沙土煮神、角杙・活杙神、大戸之道・大苫邊神、面足・吾屋惶根神、伊弉諾・伊弉冉神があらはれて之を神世七代と申します。此伊弉諾・伊弉冉神以前の

事蹟は、十分に考へることは出來ません。

天地のひらけし時の葦牙や、神の七代のはじめなりけむ　法印定爲
すむは空濁るはつちと別れにしその古も神ぞ知るらむ　足義利持
知るらめや豐葦原の葦牙の、ひらけてなれる國津神とは　權律師謙忠
諸々のなり出るもとは神產靈高皇產靈の神の結びぞ　本居宣長
海原や浪にたゝよふ葦牙のかひある國となれるかしこさ　津守國冬
あしかひの浪のきざしも遠からず天津日嗣の始ともへは　藤原春海

二　磯馭盧島

別天神神は、伊弉諾・伊弉冉の二神に玉を以て飾れる天瓊矛を賜ひて、國土の未成らずして、漂うてをるのを造り固めさせられました。二神天浮橋（船なり）に立たれて、瓊矛をさし下し、滄海を搔き探り、やがて、之を引き上げ給ふ時に、其矛の鋒より滴りし潮が、忽に凝りて島となりました。磯馭盧島と名づけられたが、之れは、自と凝れる嶋と云ふ義であります。今の淡路の沖嶋であらうとの說があります。

二神は、此島に天降りまして、先づ天御柱を立て、八尋殿（廣き御殿の義）を作られて、共俱に住ませられました。さて、二神互に約束をせられて伊弉諾神は左より、天御柱を巡り、伊弉冉神は右より、天御柱を巡り、

諸冉二神天浮橋に立たせ給ふ

兩神一處に御逢ひの時に、女神先づ「あな妍やし可愛男を。」と唱へ奉れば、續いて男神「あな妍やし可愛少女を。」と、和せられました。此の意味は、「嗚呼立派なる壯夫よ」「嗚呼、美しき少女よ」と云ふ

程のことであります。此五言二句は、我國の和歌の抑の始めであります。

伊弉諾神は、伊弉冉神に「婦人の始めに、發言するは善からぬ事なり」と、申された。かくて、二神の間に、水蛭子が生れたけれど、葦船に入れて流し棄てられました。其次に淡島生れました。二神共に相談さるゝには、「今我等が生んだ子の良からぬは、いかなる譯であらう、事情を委細天神に申し上げて、その差圖を受けませう。」と、共倶に、天神の許に至りて、教を受けられしに、天神は、之を太占と云ふ卜に問はれて、さて、「これは、女神の男神に先ち云へる爲である。又還り降つて云ひ改めよ。」と仰せられました。そこで二神は、其仰に從ひ、前と反對に互に天御柱を巡りあひ、男神先づ云ひ、女神之に和せられました

が。かくして後、二神は、淡路・四國・隱岐・筑紫・壹岐・對島・佐渡及び大倭豐秋津島の八島を生ませられました。因りて大八島の稱があります。

こゝの生むと云ふのは、發見の意味でありませう。後二神、一旦は、磯馭盧島に還り、更に吉備の兒島・小豆島・大島・姫島・値嘉島等を生ませられました。かく國を生み終へて後、更に生める神々は、海神、名は大綿津見神、風神名は級長津彦神・級長津姫神、木神名は久久能智神、山神、名は大山津見神、野神、名は鹿屋野姫神、火神、名は軻遇突智神、等であります。かくて、二神の生める島は十四島、神は三十五神ありとのことであります。

さて、伊弉冉神は、火神を生みし爲、燒かれて崩御せられたと傳へられてをりますが、之を紀伊國熊野の有馬村（南牟婁郡有井村大字有馬）に葬られました。土民は、此神の靈を祀るに、花時花を以て祭り、又鼓・節・旗等を用ひ、歌ひ舞ひて祭ること、今も猶渝らぬと云ふことであります。今有馬村の海岸に花窟と稱ふる所があつて、此神の陵なりと傳へ、其傍の王子窟には、火神を祀り、又其西數町に、產田神社等もあつて、親子三神を奉祀してをります。一說には伊弉冉神を、出雲國と伯伎國との堺なる比婆山に葬り奉るとも傳へてありますが今比婆山の所在が明でありません。或は今の備後國、惠蘇郡、比和村布見谷が即これであるともいうてをります。

おし照るや難波の崎ゆ出立ちて我國見れば粟島於能碁呂島檳榔之島も
見ゆ佐氣都島見ゆ

二　破馭盧島

天の下國は多けど、神ろぎの生みなしませる大八島國　本居宣長
神祭る花の時にやなりぬらむ有馬の村にかくるゆふして　藤原光俊
三熊野の御濱によする夕浪は花の窟やの此ぞ白木綿　西行法師
くゝのちか生みほどこせるいろいろの木こそ都のかざりなりけれ　源公輔
年毎の春や昔のかやの姫野にも山にも草の燃ゆらむ　平齊章
父母はあはれと見ずや水蛭の子は三年になりぬ足立たずして　大江朝綱

三　黄泉平阪

伊弉冉神の崩御せられました時に、伊弉諾神悲しみに堪へ兼ね、「愛しの我妹、（男より女を指して云ふ）いかなれば、子に代りつるや」、と歎かれ、果ては胸中の苦悶やる方もなくて、打ち倒れて泣き叫ばせられました。其時落ち滴りし涙より泣澤女神がなり給ひました。此神は、大和の十市郡天香山の畝尾の木本に鎭ります神であるとの事であります。さて苦悶の末、何の御考もあらせられず、伊弉諾神、佩かせ給へる十握劍に御手懸ると見るや、早くも矢庭に、御子軻遇突智神の首は血煙を上げて前に落ちましたが、其劍の鋒に着ける血より、磐裂神、根裂神、又劍の鐔に着ける血より、甕速日神、又劍の柄に集れる血、御手

の指の股より漏れ出でゝ、闇龗神・闇罔象神など生れられました。又殺されし火神の頭・胸・腹・手・足等よりも、夫々種々の神々が生れ給ひました。

伊弉諾神、尚も思慕の情止み難くて、是非に、今一度、其妹の音容を見やうと思はれ、黄泉國に追ひ行かれましたが、伊弉冉神は早く之を見られて早速に出で迎へられました。敏くも之を見られた伊弉諾神は、嬉しさの餘り、「我妹よ。我れ、鄉と經營せし國、未作り終へざるに、早く黄泉國に還り給へるは、情なし」と、宣へば、女神は、流石、恩愛の情に堪へ兼ね、「嗚呼、思へば悔し、我兄（○女より男に向ひて呼ぶ名稱）速く來まさゞること。吾れは、早、此黄泉國の食物を喫へり。今は如何ともする事難し。されど、折角、我君の來ませるにより、出來べくは還らんとぞ思ふ。暫く、黄泉國の神達と協議せん程に、少しの間待たれよ。但其間如何なる事有らんも、決して我を視給ふな」と、云ひ捨てゝ、殿内に入りました。男神は其言葉を守つてをりましたに、久しく、待てど暮せど、中々に、女神の影形さへも見えません。見るな見せずと云はれては、却つて見たくなるは、これ、古も今に變らぬ人情の常、神とてもやはりさうでありませう。今は猶豫もなり兼ねて、伊弉諾神は、其左の髻に挿せる櫛の雄柱（○左右にある端の大なる齒）を、一箇缺き、火を付けて手燭とし、密と吾妹や何處と隙見をしますと、あら不思議、先づぶんとして鼻を撲く臭穢、充ち滿ちて膀脹し、膚と云はず腓と云はず、一概に爛れ腐つて赤黑味の膿汁は、ぶよ〳〵と流れ出で、其上に、蛆虫は所得顔に、のそ〳〵這ひ集り、一目見るさへも胸が惡くなるやうなるに況して、頭にも、

胸にも、腹にも、手にも、足にも雷が居て隙さへあらば、今にても飛んで懸らうと云ふ其恐い有様に、男神は肝を消し心も惑ひて、急ぎ逃げ延びやうとするのを、女神は、早くも之を悟り、「郷約を守らで、耻かゝしめし事の怨めしさよ。如何に逃げても逃すまじ。」とて、直に黄泉醜女をして追はしめました。男神は、心も魂も身に添はず、唯一目散に足に任せて逃げ惑ひましたが、黄泉醜女に、追ひ付かれさうに見えましたから、髪飾とせる黒葛を取つて、投げやりますと、それが葡萄の實となりました。さて醜女が之を拾うて食ふ間に、逃れ行きましたが、又追ひ付かれましたから、更に其右の髻に挿せし櫛を缺き、て、投げ棄てますと、それが筍となりました。醜女が之を拔き取つて食ふを見て、一生懸命に逃げ延びますと、後よりは、見るも恐しい八雷神を大將とし、幾千萬とも知れぬ、黄泉軍が續々として追うて來ます。伊弉諾神、これは彌以て大變なりとて、腰より例の十握劍を明晃々と拔き放ちて、後に振りかざし、息も絶ゆるばかりに、這々の體にて、辛と黄泉平坂に到り、其坂本にある桃の實を、手當り次第、三ッ取りて打ちつけましたが、不思議や、流石の黄泉軍もこは溜らずと散りぢり〳〵に亂れ走つたので、伊弉諾神は始てほつと一息して安堵しました。かく桃の實が靈異がありしによつて、其功を稱めて、伊弉諾神は桃樹を、大神實命と名づけられました。さて又或説に、伊弉諾神、危くも黄泉軍に追ひ付かれんとせし時に、大樹の蔭に隱れて、放尿せしに、忽に、大川が出來て、水が滾々と流れ、黄泉軍が之を渡り困む間に、黄泉平坂に、無事に落ち延びられたともいひます。

さて、黄泉軍の最後に追蒐け來れる、伊弉冉神が、黄泉平坂に着きました時は、早、後の祭にて、大磐石は、平坂の眞中に塞がつて、此の石一重が、すなはち此世とのさかひでありますから、室が近くして、人が遠いと云ふ御嘆を見られました。かくて、二神は、心冷き石を中にして、向き合ひながら、今よりは夫婦の御縁を切る由約られました。其時女神「我兄の君、かくし給はゞ、卿が國の人々を、日に千人づゝ縊り殺さん。」と云ひますと、男神は、「我妹の君、左樣にし給はゞ、我は、日に千五百人を生まん」。と答へられ、「此より内へは來な」。とて、杖を女神に投げられました。之を岐神と申します。さて人が日に千人づゝ死に、千五百人生るゝと云ふのは以上のわけによるのなさうです、又此の故に伊弉冉神を黄泉大神とし、又其追ひ及しより、道敷大神とも、申し、又彼の大磐石を、黄泉門塞大神とも、道反大神とも名づけたのです。此の所謂黄泉平坂は、即今の出雲國にある伊賦夜坂の事なりと云ひます。さて、又黄泉國とは、何處かと云ふに、此世にはない想像の國にて、人の死後に行く夜見國であらうとも、又山陰道或は朝鮮國あたりの或地方であらうとも、區々の説があります。

きたな國、夜見國べはいなしこめ千代とことはに、此世にもがも　本居宣長

天地の昔を問へば葦原や尙其かみの代々ぞ久しき　讀人不知

千五百秋の國治めたる跡をのみ萬代今も忘れやはする　矢田部公望

四　檍原祓除

伊弉諾神、命からがら、黄泉國より逃げ還りて宣ふには、「吾實に見るも汚しく穢き國に行きけり。いざ、身の禊して清めん。」とて、往きて阿波の鳴門と速吸名門とを視られましたが、二箇處共に、潮流が速くて、祓に不便てありましたから、更に筑紫の日向の小戸の橘の檍原に至り禊祓をされました。其地は、今詳ではありませんが、日向國宮崎郡に、其遺跡があると云ふことです。伊弉諾神眞先に杖を投げ、次に帶・裳・衣・褌・冠・左右の手纏と、順次に脱ぎ棄てられましたが、此等より、夫々の各神がなりました。さて、此傳説によつて、太古の服制も略、想像が出來るのであります。

伊弉諾神「此水上は、餘りに瀨早く、又水下は、餘りに瀨弱し」と、仰せられて、親ら、中程の流に降りて、御身を滌がれましたが。其時八十禍津日神・大禍津日神がなりました。即汚穢國に到りし時の汚垢からなれる神でありますが。次に、其禍を直さんとて、神直日神・大直日神・伊豆能賣神の三神がなりました。又水底にて滌ぎし時になりし神は、底津少童神・底筒男神、又水中にて滌ぎし時になりし神は、中津少童神・中筒男神又水上にて滌ぎし時になりし神は、上津少童神・上筒男神でありますが。而して以上の三筒男神は、住吉大神と申して、諸國に祭られてをりますが、今の攝津國東成郡住吉村に鎮坐せる、官幣大社住吉神社は、最有名であります。又長門國豐浦郡豐東上村に鎮坐せる國幣中社住吉神社は、其荒魂を祀つた者であります。又三少童

神は、阿曇連の祖神として、祭つてをる者にて、同族は、少童神の子宇都志日金拆命の後裔と稱はれてをります。

又伊弉諾神、左の御目を洗ひし時に成れる神は、天照大神、又の名を大日孁貴とも、又は日神とも申します、右の御目を洗ひし時に成れる神は、月讀尊、又の名を月尊、又鼻を洗ひし時に、生れし神を素戔嗚尊と申します。此時、父神、非常に歡び給ひて、「吾れ多くの子を設け、最後に、かゝる貴き三人の子を得たる嬉しさよ。」と、仰せられ、その飾とせる御頸珠を取つて、天照大神に賜ひ、高天原を治めしめ、月讀尊には、夜見國、又素戔嗚尊には、海原を治めよとの、夫々の御申渡がありました。然るに、獨、素戔嗚尊丈は、命ぜられし國を治めないのみならず、最早小供時代を經過し、八握鬚（○長き鬚）胸前に垂るゝ御年になられても、泣き騷ぎますので其の爲に、海河も涸れ、草木も枯れ、惡神は跋扈し、人民の夭折する者が多くありましたから父神大に怒られ、「汝、何故に、命ぜる國を治めずして、かくは泣くぞ。」と、問はせ給ふと、「吾は、母君の在す根堅州國に行きたさによりて泣く。」と、答へられた。父神益怒りて、「汝は、此國に住む可らず。」とて、素戔嗚尊を放逐されました。尊、「さらば、仰に從はんも、唯高天原に上り、姉上に違請をせんと思ふにより、此丈は、免されよ。」と、歎願に及びましたから、許されました。

伊弉諾神は、嘗て、天神より命ぜられました國土經營の大任を、首尾よく果されしにより、天に上つて、天神に復命し、日之少宮に御留りなられたと云ふことです。多賀神社とは、皆此神を祭れる者にて、諸國に多い中でも、近江國犬上郡多賀村に鎭坐なさるのは、官幣中

社で、最有名であります。又淡路國津名郡多賀村にも、伊弉諾神社があつて、官幣大社です。又皇大神宮域内にもあります。

罪しあらば清き川瀬にみそぎして、速秋津姫にはやあきらめよ　本居宣長
神代より其名は今も橘や、小戸のわたりの船の行末　伊東義祐
禍事をみそがせれこそ、世を照す月日の神はなり出てませれ　本居宣長
月讀の神も昔を忘れずば、昔き影に我をもらすな　神祇伯顯仲
月夜見の天に上りて闇もなく明けき世を見るが樂しさ　原公忠
橘の小戸の潮瀬に顯れて昔ふりにし神ぞ此神　津守國量

五　天地震動

素戔嗚尊が暇請として天に上りますと、羽明玉命が、之を途に迎へて、瓊を獻じました。尊は之を受けて前みましたが、山川も其爲に動き、國土も皆震ひました。天照大神、これは常事ではないと驚かせ給ひ、「我兄の上り來ませるは、これ、必我國を奪はん爲ならん。油斷ならずとて、雄々しくも、之に對する防禦を思召され、御髮を解きて髻に卷き、御裳を括りて袴となし、左右の髻にも、髮にも、又左右の御手にも、皆種々の曲玉を纏き付けられ、背中には、矢を數多入れたる靫を負ひ、手には鞆を取り佩き、弓杖突き、兩足を踏張り、大音聲上げられて、「汝は、何用ありて、茲に來れるぞ。」と、問はせられますと、弟の尊は、「吾

天照大神の男裝

は、決して惡意なし。唯父尊より放逐せられしにより、一度は姉尊に逢ひ、遑請申さん爲に來れるなり。」と、恐る〳〵申されましたが、大神は容易に信用し給はずして、「さらば、汝が心の少しも曇りなく佯なきを、何にて保證するや。」「各、神に誓を立てゝ、子を生まん。若、吾が生める子の女ならんには、惡心ありと思召せ。若又男ならんには、惡心なきを信ぜられよ。」と、兄妹の神は互に論爭はれました。

天照大神、そこで、素戔嗚尊と、天安河を中に置いて、向き合はれ、先弟尊の佩ける十握劍を貰ひ受け、之を三段に打ち折り、天眞名井に振りすゝぎ、又之をかり〳〵と齧み碎きて、ふつと吹き出されましたが、其息より成れる神は、田心姫・湍津姫・市杵島姫の三女神であります。次に、素戔嗚尊、姉神の、左の髻に纏きし飾玉を貰ひ受けて、前の

如く齧みて、吐き出せる息より、なれる神は、正哉吾勝々速日天忍穗耳尊、又右の髻に纏きし飾玉を貰ひ受け、齧みて吐き出せる息より、なれる神は、天穗日命、又其髮に纏きし飾玉を貰ひ受け、齧みて吐き出せる息より、なれる神は、天津彦根命、又左の手に纏ける飾玉を貰受け、齧みて吐き出せる息よりなれる神は、熊野櫲樟日命にて、以上總て五男神を生ませられました。そこで素戔嗚尊の惡意のないことが、彌〻明になりました。

其時、天照大神、弟尊に曰はゝるには、「此五男は、元來の根が、吾物によりて生れたれば、吾子なり。三女は汝が物によりて、生れたれば汝が子なり。」とて、三女神を弟尊に授け、五男神を日神自ら、養はれ、天忍穗耳尊を以て、其太子と定められました。

三女神は、宗像神社として、宗像氏の事へ奉る神であります。今は、官幣大社で、筑前國宗像郡にありますが、田心姫命は奥津宮として、澳津島に、市杵島姫命は中津宮として、大島村に、湍津島姫は邊津宮として、田島村に鎭坐してをります。其他、大和・尾張・下野・伯耆・備前・肥前等にも、此神社があります。肥前東松浦郡呼子村にある、田島神社は此三神を祭り、國幣中社であります。且我國三景の一としてもてはやす、安藝國作伯郡嚴島町に鎭坐せる嚴島神社は國幣中社で、あつて市杵島姫を祭つてをります。又豐前國宇佐郡宇佐町に鎭坐せる官幣大社宇佐神宮の主神は、又此三女神であるとの說もあります、又天穗日命の子は、武夷鳥命と申し、後世の出雲國造・武藏國造・上海上國造・下海上國造○以上二は上總國海上郡　伊甚國造○上總國夷隅郡　津島縣直、遠江國造の祖神で

あつて、因幡、出雲に其神社があります。又天津彦根命は、凡河内國造、茨城國造、山背國造、周防國造、高市縣主、蒲生稲置、三枝部造等の祖神で、伊勢國桑名郡にある、桑名神社、多度神社は、此神を祭つた者といはれをります、又活津彦根命は近江國蒲生郡の彦根神社に祭られたと云ふ説があります。

御背に千のりの靫を負ひまして男たけびまし〳〵日大御神　本居大平
我國は天照神の末なれば日の本とも云ふにぞありける　藤原良經
榊とる八十氏人の袖の上に神代をかけて殘る月影　土御門天皇

六　天岩窟隱

かくて、素戔嗚尊の心の清き事、立派に證明されましたので、得意の心押へ難く、萬事に付けて、傲慢不遜の擧動が多くありました。假令ば、大神の作り置かれた田の畔を斷つたり、溝を埋めたり、又神嘗祭行はんとて、折角新に用意せられた宮殿に、糞を塗つたりして、其亂暴狼籍至らざる所なしと云ふ有樣でありました。しかし、溫厚寛大の德を備へられた大神は、左程御咎もあらせられずに、「新殿にて、酒に醉ひし爲、嘔吐にても吐きしならん。畔斷つたり、溝埋めたりしたのは、可惜な事なれば、其處をも、田にせん量見ならん。よし〳〵、仕方なし。」とて、善意に之を解釋せらるゝを、結句、善い事に思つて其亂

暴が一層酷くなりました。

又天照大神が、神に供へん爲、新に服屋をしつらへ、謹慎に、謹慎を加へて、機を織らしめられたのに、素戔嗚尊の亂暴も、程があるもの、或日密と、其屋根に上つて、孔を穿け、其孔より、皮を剝いだ生馬を、どつと落しました、下で唯無心に機を織つて居た織女は大怪我をして、遂に、息が絶えた。この樣を見ては、如何に、溫厚寛大の大神も、堪へ兼ね、天岩窟に入り、戸を閉めて御隱れになられました。そこで、高天原も、葦原の中國も、皆眞暗闇となつて、惡神達が、世にはびこつたので、天下の神々は、皆憂ひに憂ひ、悲みに悲みました。此段は、明德の聞えある、天照大神が御隱れになられたにより、其爲に惡者共が世に跋扈したのを、天下眞暗闇になつたなどと、譬へた者であると思はれる。

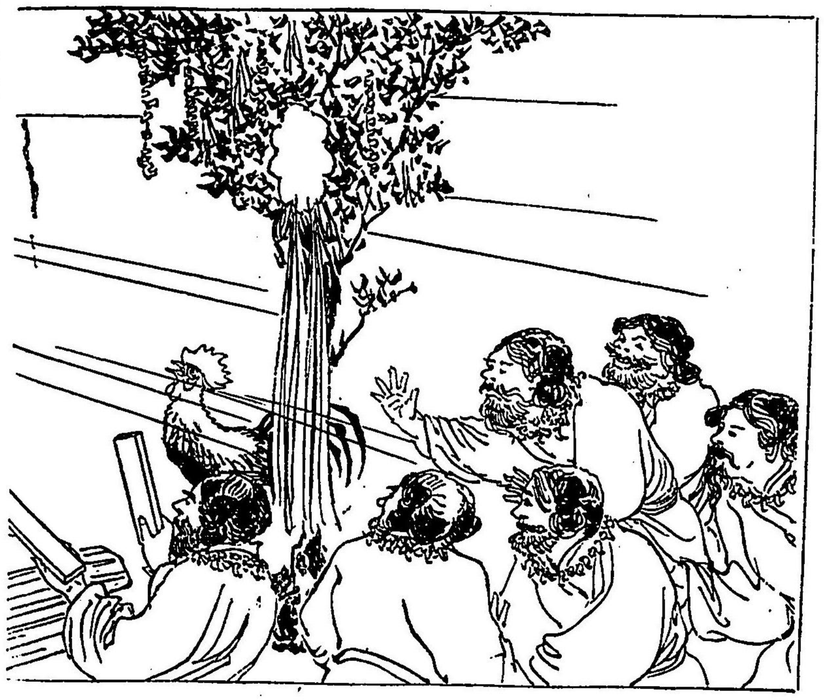
世界が暗くなつたので、八百萬神々が、天安河原に會議を開き、善後方法を相談しました。此時高皇產靈神の子に、思兼神とて、智惠が衆に勝れ、如何なる事でも、考へ當てぬ事なく、諸神の思ふことを、一人で、兼ね持つと云ふ貴い神がありましたが、其神の發議で、大神の像を、鏡に寫し造り禱たがよからうと、先づ鷄を集めて鳴かしめ、天安河の河上の、天堅石と、天香山の鐵とを取り、鍛冶の天津眞浦をして矛を作らしめ、石凝姥命をして、日神に象れる鏡を鑄させましたが、始に鑄た鏡は、諸神の意に協ひませんでした、これが即ち今紀伊國海草郡宮村に鎭坐されてをる、官幣大社日前國懸大神でありません。後に造つた鏡は頗麗しく、八咫鏡として三種の神器の一に數へ

られ、今の大神宮の御神體として、伊勢に祭られてをらるゝものが即ち是であります。又、玉祖命には、八阪瓊曲玉を作らせました。さて忌部の祖神太玉命、中臣の祖神天兒屋命には、天香山の鹿の肩骨を丸拔にし、白樺の皮で燃して卜をさせ、且天香山の枝葉の盛に繁つてをる榊を根ながら拔き取り、其上枝には、八阪瓊曲玉を着け、中の枝には、八咫鏡を懸け、下枝には、青白の和幣○後世の紙帛の幣帛の起源を結び垂れ、太玉命は、之を捧げ持ち、天兒屋命は、祝詞を大神に白しました。そして大力無雙の天手力男神は、岩窟の側に、こつそり隱れてをる、岩窟の前には、庭燎をどん〳〵焚く、猿女の祖神、天鈿女命は天香山の眞拆を髮とし、日影髮を手襷とし、茅纏の矛を持ち、槽を覆せて、其上で踊りました。此の命の、胸乳を顯はして、槽の上をどん〳〵踊り廻る有

様が如何にも可笑しいので八百萬神達も溜り兼ねて、一同どつと笑ひ出し、其爲に高天原も震動しました。

天岩窟に御隱れになつて居られた大神は不思議で堪りません。「吾、隱れて、高天原も、葦原中國も眞闇にて、天地萬物皆困り果てんと思ひしに、天鈿女の踊り廻り、八百萬神の大喜びするは、如何にも心得難し。」と、仰せられますと、天鈿女命は取りあへず、「大神よりも貴き神います故、かく喜び遊ぶなり。」と、答へ、天兒屋命・太玉命は、八咫鏡を、大神に向けて、御覽に入れしに、大神は、愈不思議に溜り兼ね、戸を少し隙あけて御覽なさらうとせられた其刹那、今か今かと機を待つてゐた戸側の手力雄命は、御手をやつと計りに捉まへ、無理無體に大神を御出し申しました。太玉命は、標繩を、其後に引き亙し、「此より

天岩



内に、又還り給ふな。」とて大神を新宮に御遷し申し上げ、天鈿女命を御前に伺候さして、御機嫌を伺はしめ、豐磐間戸・櫛磐間戸二神に、宮門を護衛させることゝしました。

初め、大神の岩窟から出でさせられた時、明光がぱつと一閃して、高天原も、葦原中國も、一度に

窟

六　天岩窟隠

明くなつて、衆神の面が皆白く見えたが、嬉しさの餘り、自然と、手を振り足を踏まえて、踊り廻りました。其時異口同音に歌つた歌は。

嗚呼天晴　嗚呼面白
嗚呼樂し
嗚呼さやけ
嗚呼おけ

嗚呼は、今の「あゝ」と同

じで覺えず自然に發する語、天晴とは、天の晴るゝこと、面白とは、今迄天照大神、天岩窟に御隱れの爲、面黑きを再び御出ましになられた爲、面白しとの義、樂しとは、餘り面白くて、今迄屈托して、手足も伸びざるが、覺えず知らず、手も足も伸び〳〵して、手の舞ひ足の踏むを知らずとの義、さやけとは、此時持ちし竹の葉の、さや〳〵と音がしたと云ふ義、又おけとは、手に持つてゐた木の響いた音を云つた者なさうです。

神樂と云ふのは、此故事から起つたのである、又此時仕へ奉つた神々は、孰れも其職を、子孫に讓り傳へて、夫れ〴〵、名のある貴族となつた。即石凝姥命の子孫は、鏡作部となつて、代々鏡を作り、玉祖命は、周防國佐波郡右田村に、國幣小社として祭られ、其子孫は出雲國に居つて、毎年玉を奉つたさうである。天兒屋命の子孫は祭官として、君と神との中に立ちて、神に仕ふる中臣部となつた、大和國添上郡奈良市の官幣大社春日神社、又河內國中河內郡枚岡村の官幣大社枚岡神社は、即此神を祭つたものである。又太玉命の子孫は、其身を忌み淸めて、神に仕ふる忌部氏となり、其子孫阿波安房に繁殖した。即安房國安房郡神戸村にある、官幣大社安房神社は、太玉命を祭つた者である。又手力雄命は伊豆紀伊國などに、祭られ、其命の岩戸を開いた時に、其戸が信濃國に落ちて山となつたが、戸隱山は即ちこれであるといひ傳へてをる。今の上水內郡戸隱村にある國幣小社戸隱神社は、此神を祭つた者であると云うてをる。

久方の天岩戸の開けしより出づる朝日ぞ曇る時なき　後嵯峨天皇

思乗たばかり事をせざりせば天岩戸は開けざらまし　阿保經覽

常闇も樂しき御代となりけるは天手力雄たすけありけり　阿刀春正

朝な〳〵照る日の光見る毎に兒屋根の尊いつか忘れむ　源仲遠

久方の天照神を祈るとぞ枝もすゑ〳〵に幣はしてける　物部安興

常世なる鳥の聲にて岩戸とぢ光なき夜は明けはじめける　三統公忠

七　曾尸茂梨

天照大神が、岩窟を出でさせられたので、天地は再明るくなり、諸神が始て安堵しましたが、元々、事の起りは、素戔嗚尊にありますから、此儘には置かれぬと云ふので、罰として種々の解除を命じ、又髯を切り、手足の爪をも拔かしめて、「天上にも此中國にも居り給ふな。」とて、底の根國に放逐をされました。

身から出た錆の報とは申せ、素戔嗚尊は、今更如何とも仕様がなく、行方定めず、只足に任せて迷ひ歩きましたが、折悪しくも降る春の長雨が晴まもなく、じた〳〵と降り續き、忽ち身は濡鼠の様になつて、心、氣の惡さは何とも云ひやうがありません。尊は仕方がない

から、青草を結び結んで、假の蓑笠とし、行く〳〵一時の宿を、神達に頼んで見ましたが、誰も〳〵、「貴様は亂暴して勘當された者だ。さういふ者には宿を貸す事はできぬ。」とて、すげなく跳ね付けられるので、篠つく雨にも宿る小屋さへもなく、宿なし犬と同樣、流石武勇の素戔嗚尊も、しょぼ〳〵と、悲しくも所定めずさまよひあるかれました。この事柄よりして、世間では、蓑笠を着、又は草束を負ひて、人家に入ることを嫌ひ、萬一之を犯した時は、其人に解除を命ずる事となり、其風は、今でも西國の所々に遺つてをると云ふことです。

素戔嗚尊、今は疲れ果てた上に、腹さへ空いて、餓じさに溜り兼ね、大食津姫神の許に至り、食物をねだりますと、姫神は鼻や口や尻から、色々の味物を出して、樣々に調理して上りました。素戔嗚尊は、此樣を御覽になり、「こんな穢い物、何んで、食べられる物か。」と、日頃の御氣性を顯し、一劍を拔き放ち、忽に姫神を眞二に切り殺しました。其殺された屍の頭に牛馬、額に粟、眉に蠶、眼に稗、腹より下には、稻・麥・大豆・小豆が生じました。後に天照大神、此を御覽なされて、此等は、「蒼生○人民の糧の食つて、活くべき物なり。」と、仰せられ、此等の種子を、田畑に植ゑられ、又口に繭を含まれて、口熱で、溫つめ、手にて絲を抽き出されました。農業養蠶の事は、此時に起つたと傳へられてをる。大食津姫神、又保食神とも、豐受姫とも、倉稻魂とも稱へ、火神の子、稚產靈神の子と云はれて居りますが、伊勢豐受大神宮を始として、山城國紀伊郡深草村字稻荷山に鎭坐せる、官幣大社にも、亦此神を祭つてをります。

其後素戔嗚尊は、流浪して、其子十五猛命と、韓に渡り、新羅國曾尸茂梨の地に居られました。今の江原道春川府牛頭山は、其地だらうと云ふことです。尊「吾、最早、此國に居るを好まず。」と、仰せられて、土船を造り、又我國に戻られましたが、出雲國安來に到着された時に、「吾心安すけくなりぬ。」と、仰せられし爲、其地を安來と名けました。

又、素戔嗚尊が、其子に仰せられるには、「韓國には、金銀多し、之を我國に運ばんには、浮寶（船の義か）なくては叶ふまじ。」とて、鬚を拔いて散されますと、杉となり、胸毛は檜となり、臀毛は柀となり、眉毛は樟となりました。因つて、其用方を定めて、杉と樟とは浮寶、檜は宮殿の材木、柀は棺材とせよと命ぜられました。五十猛命は、數多くの木種を韓より持て來て、其妹、大屋津姫命・抓津姫命と、筑紫より始て大八洲の國々に播き頗る殖林に功勞が多くあります。殊に紀伊國には、其播殖の著きより、上古木國と唱へ、奈良朝に至り、地名は、凡二字の佳名を擇べとの詔より、木を紀と改め、之に無意味に伊字を添へて、紀伊と書いたのである。さて此三神は、孰も紀伊に祭られ、多く國民の崇拜を受けてをります。紀伊國海草郡西山東村に鎭坐せる國幣中社伊太祁曾神社は、大屋毘古卽五十猛命を祭り、又妹神を、大屋都比賣神社・都麻津比賣神社と申し、之を合せて紀の三所神と唱へ、歷朝の尊崇の厚い神々であります。五十猛命を、又韓神曾保利神とも申します。

朝もよし木路の繁山分けてきて木種蒔さけむ神代し思ほゆ　本居宣長

七　曾尸茂梨

五種の穀物をば保食の神ぞなしける萬代の爲　藤原由通
何事のおはしますをば知ねども忝さの涙こぼるゝ　西行法師
天なるや八十の木種を八十國にまき施しゝ神ぞ此神　本居大平

八　八岐大蛇

素戔嗚尊は、出雲の安來から、肥河上なる鳥上と云ふ地に到りました。肥河は、出雲國簸川郡斐伊川であらうと云ひます。太古の事であるから、人家とてもなく、山又山、谷又谷の寂しい所を歩かれたでせう。然るに、不圖河を見ると、箸が一本流れて來る。尊は此河上には必常人がをるだらうと見當を付け、流に溯つて尋ね行きますと、果して人がをりました。近いて之を見ると、年老いた夫婦が、未年若い花も羞らふ程の乙女を中に置いて、さめ〴〵と泣いて居た。尊は甚不思議に思召され、先其名を御聞きになると、「吾は國神大山津見神の子、名を足名椎と云ふ者。又これなるは、吾妻の手名椎、又、此は、吾娘

の奇稲田姫なり。」と、恐る〳〵申上げました。又「何故ありて、哭く。」と、仰せられますと、「元來、我等には娘八人もありしに、皆、高志の八岐大蛇に喫はれたり。又此娘も喫れんに、其間程なかるべし。されば、可愛さの餘り哭くなり。」と、申しました。尊「一體、其高志の八岐大蛇とは、如何なる形を持てる。」と、問はせられる。「されば、なり。眼は恰も赤酸漿の如く、てか〳〵と光り、軀は一つなれど、頭は八つ、尾も八つあり。軀に蘿や檜や杉やが一杯に生ひ、腹には不斷赤血爛れ、其長きこと、八つの山谷に亙り、其恐しさ、何とも彼とも申し難し。」と、云ふうちも軀震へ、語さへ低く、如何にも畏ろしげでありますが、尊は、さも面白しと、云はん計りに、「よし〳〵、憎むべき大蛇、何程の事かあらん。一切吾に任かせよ。して其娘を吾に奉れ。」と。仰せられた。「いかで仰に背くべき。見

八　岐　大　蛇

奉れば高貴の方と思はる、御名を承りたし。」「今は、何をか包むべき。吾は天照大神の弟にて、今天より降れる所なり。」と、仰せられますと。老夫婦は、唯感涙に咽んで有り難く御請けをしたから、尊は姫を櫛に化へて、髻に挿されました。さて尊は、老夫婦に仰せて、酒を造ら

せ、又垣を引き廻し、其垣に、八門を作り、門毎に、棧敷を築き、棧敷毎に、槽を置き、槽には、酒を一杯に盛らせて、大蛇の來るを待つてをりました。やがて、時刻が來ますと、案の如く、八岐の大蛇は、老夫婦の前の咄の如く、いかにも恐しい樣をして來り、物をも云はずに、其八頭を八槽に入れて、息をも吐かずに、ぎう〳〵と酒を飲んだが、直に醉が廻つたかして、前後の正躰もなく、寢入つてしまつた。尊は、時刻は、よしと、其佩き給へる十握劍を拔き、何の苦もなく、大蛇を、片端より、ずん〳〵に、恰、大根や、人參を切る樣に、切りますと、血が餘り澤山出たゝ爲に、肥河の水が、一杯眞赤になつた。さて尊は、段々大蛇を斬つて、尾の方に及んだ時に、何んだか、こつんと、音がして劍の刄が毀れた故、不思議の事と思ひ、尾を割いて、善く〳〵見ると、其處に、一本の劍が這入いて居つた。前に、大蛇の棲める邊に、始終雲があつて、叢つてゐたのは、此靈劍を守護する爲と知られました。因つて、此を叢雲劍と名づけ、之は私に用ふべき物ではないとて、大神に獻上しましたが、即、後の草薙劍で、前に石凝姥命の鑄た八咫鏡と、玉祖命の造つた八阪瓊曲玉と共に、三種の神器と呼ばれ、天皇の御寶として、代々相傳して、神代の昔から、今日まで變らぬとは、何と貴い事ではありませぬか。今の尾張國愛知郡熱田町にある官幣大社熱田神宮は、此神劍を祀つたのである。

かくて、素戔嗚尊は、稻田姫を妃とし、共に棲む宮を作らんとて、出雲國須賀の地に到られました時に、「我心淸淨しくなつた。」と、仰せられて、宮殿を作られました。因つて、其地を須賀と稱へます。其時雲の

立ち昇れるを見られて、尊、

八雲起つ、出雲八重垣、妻ごみに
八重垣つくる、其八重垣を。

と、詠まれました。これが、卽、我國の三十一字の短歌の起りである。さて、彼の亂暴狼籍至らざるなく、八百萬神に迷惑を懸け、武勇一點張りと思ひし荒くれ男の尊が、かゝる優美な風流の御嗜あらうとは、誰も思ひ懸けぬ所でありましたらう。武く勇しく、而して情あるは、此我國俗で、神代の昔から然うであつたのである。此尊は、武藏國北足立郡大宮町の官幣大社氷川神社にも、出雲國簸川郡日御崎の國幣小社日御崎神社にも、同國飯石郡東須佐村の國幣小社日御崎神社にも祭られてをるが、諸國の祇園社は、皆此神を祭つた者である。

八雲起つ、出雲八重垣、今日までも、昔の跡は、隔てざりけり　藤原良經

素戔嗚の神ぞ大蛇をさしさきて、取得ましける草薙の大刀　本居大平

素戔嗚の神の御代より、荒金の土に傳へて、茂る言の葉　小澤蘆庵

九　因幡素兎

素戔嗚尊の七代目の孫(或は子ともあり)に、大國主神と申す神がありました。兄弟の慓悍無賴なるには少しも似ず、中々溫厚篤實の性行で、他神の畏敬を受けました。さて諸兄弟は、因幡の八上媛を娶らうとて行かれた時に、此神に袋を負はせ、從者の躰にて連れられたが、途中氣多崎に行つた時、毛の無い一匹の裸兎が、其處に轉がつて居た。そこで、諸兄弟は、串戲半分に、兎に向つて、「ア、可哀相な事だ、貴様は海水に入り、そして、高山の上の、風の善く吹く處で乾かしたならば、直癒るだらう。」と、云はれますと、畜生の悲しさに、兎は、之を眞正直に受けて、海にざんぶと飛び込み、教へられた様に、風に吹かれた處が、水の乾くに隨つて、軀がびり〳〵と、痛み出すので、七顚八倒の苦み、おい〳〵と鳴き出した。丁度その處に、大國主神が通り懸つて、「何んで苦む。」と、問はれたから、兎は、有りし次第を、殘らず白狀するには、「一躰、吾は隱岐島に居りましたが、此地に渡らうとしたけれど、其の方法がないのに困まりはて、海の鰐を騙して云ふには、『吾と貴様とは何方が、一族が多いだらう、較べて見ん程に、貴様の一族を、悉皆此に召び寄せて、此の隱岐島から彼の氣多崎まで整列さして見よ。吾、其上を渡りながら、一、二、三、、、、と數へたら、何方が多いか、直に解るだらう。』と、いひますと、鰐の馬鹿者めは、騙されるとも知らずに、吾の云ふ通り、ずらりと並べたのを、吾は可笑しくて溜りませんでしたが、眞面目な振をして、片端より一、二、三、、、、と數へ、いよ〳〵

此處に着いたと思つた時に、もう大丈夫と、「間抜奴等、此の吾に騙されやがつたな。」と、云ひますと、最後の鰐は、「己、太い奴だ。」と、怒喚つて、吾を捉へ、吾毛衣を皆剝ぎ取つて、其儘海中に沈んで行きました。それで、痛くつて溜らず、おい〳〵泣いて居りました處を、最前通り懸つた神々が、「善い事を教へてやる。」と、云はれた通り、海水に這入りました處、今度は皮の剝けた身に、鹽水が着いた爲、風に晒され、乾くに隨つて、びり〳〵と針でも刺される樣な傷、何にも斯にも仕樣がないので、今更惡い事は出來ない者と、前非を後悔して居ります所です。」と、長物語をした。此を聞かれた大國主神は、「何ぼう何んでも、夫は可哀相だ。早く、あの河口に行つて、眞水で躰を洗ひ、そして其處にある蒲の花を取つて、地面に敷き、其上を轉び廻らば、元の膚の樣になつて、吃度直る。」と、教へられました。兎は早速之を實行した所が、果して、元の通りの軀となつた。これは、大國主神の慈愛、禽獸に迄も、及んだとの事柄を示したのでせう。此兎は、因幡の白兎と云ふ者で、因幡國高草郡內海村に、白兎神社として祭られてあります。此兎が、其時、大國主神に向つて、「御兄弟の神達は、八上媛を得られません。袋を背負つてをられますが、尊神こそ、必媛を得られるでせう。」と、いひました。

さて、御兄弟達は、愈、八上媛の許に到りました所、媛は諸兄弟の言を聽かず、唯大國主神に從はんと、申されましたから、諸兄弟は嫉しさの餘に、弟の神を殺さうと、協議し、大國主神を伯耆國手間山（西伯耶天津村）の麓まで誘ひ出して、云ひますには、「此山に赤色の猪が住んでを

る。我等兄弟は、頂上から、之を追ひ下す程に、貴様は下で待ち受けて、之を捉へよ。萬一捉へなかつた日には、貴様を殺すぞ。」とて、猪に似よつた大石を、火にて赤く燒き、全くの猪の様に見せて、上から之をころ〳〵と、轉し落すと、大國主神は、そら、猪だと云はれて、駈け付けて、捉へやうとしましたから。無慙にも、其石に燒かれて死なれました。母君の刺國若媛が、之を聞かれて、悲嘆やる方なく、早速に、天上に駈け上つて、神皇産靈神に、大國主神の活き返へるやうにと懇請されましたから、蜊貝姫（赤貝か）と蛤貝姫（蛤か）とを下し賜はりました。蜊貝媛は、其殼を削つて之を焦し、蛤貝媛は、其中に含める水を出して、之を和ぜて塗りますと、其効驗が忽に顯れて、大國主神は元の様な立派な丈夫となりました。諸兄弟は之を見て、又欺して、山に連れ込み、大木を伐り伏せ、茹矢（楔）を、其木に作つて、大國主神を其の中に這入らせ、後で、其茹矢を拔き取りましたから、何かは以て溜りませう。びしゃんと其中に、挿まれて又々死なれた。が、しかし、此時も、母君が之れを發見されて、大に驚き、其木を割つて、最愛の子を取り出され、辛つとの事で、蘇生らせ、さて、宣ふ様、「汝、かゝるけんのんなる所には居るな。遂には、殺さん程に」とて、密と紀伊國に居る大屋毘古神の許に逃してやりました。處で、諸兄弟、之を聞きこみ、追つかけて、矢を射たが、運よくも、遂に、木の俣より逃げ去られました。

母神、まだ不安心と思ひまして、最後に、「素戔嗚尊の居る根の堅洲國に行け。大神、必よしなに取り計り給はん。」と、仰せられたので、其教に從ひ、素戔嗚尊の所に避難されたが、其女の須勢理媛に思はれて、

夫婦となられました。さて媛は其父神に、「大層立派な神が來ました。」と、申せば、父神之を見て、「此葦原醜男ならん。」とて、呼び留めて、蛇の室に寢させたが、媛は密と蛇の比禮を、大國主神に差上げて云ふには、若蛇嚙まんとしたる時は、此比禮を擧げて、三度打ち拂ひ給へ。」と、神、其教の通り、比禮を打ち振りし爲、蛇にも嚙まるゝ事なく、安眠して、蛇の室より出て來られた。其翌夜には、蜈蚣と蜂との室に入れられましたが、又蜈蚣と蜂との比禮を以て、前の樣に打ち拂つた爲に、無難に、此をも通り拔けました。其次には、鏑矢を、廣い〳〵野原に射て、其矢を取りにやり、大國主神が野原に出た時、火を付けて、燒き殺さうとしたので、今度の今度こそは、殆進退谷つて、何うにも斯うにも、仕樣がなく、死ぬより外はないと、諦らめられた處、不思議な事には、其處に、ちよろ〳〵と、一疋の鼠が這ひ出て「內はほら〳〵、外はすぶすぶ。」と、鳴いて、教へて呉れた。其義は、鼠の構へた地中の穴は、ほらの樣にて廣く、穴の入口は、窄める樣に狹きにより、火も燒け入らず、至極安全なれば、早く此穴に入り給へと云ふことである。其言に隨つて、其處を踏みしに、案の如く、鼠の穴に陷り、其間に、火は燒け過ぎた。鼠は其矢を咋はへて、子鼠と一處に大國主神に持て來た。

「夫の大國主神は既に殺された者。」と諦め、其妃須勢理媛の失望は、非常なもので、泣く〳〵、喪式の諸道具を用意されてをつたが、父神も、「あゝ、可惜男、可哀相な事をした。」とて、其死場所を尋ねられると、こはいかに、死んだと思つた、大國主命は、ひよつくりと出で來て、矢を上りましたから、皆々夢かと計驚きしが、まづは愛たいと大喜びをし

ました。素戔嗚尊は、自分の家に連れ込み、今度は、我頭の虱を取れと命ぜられた。よく見ると、父神の頭には、蜈蚣が一杯に集つてをる。媛は一策を案じ、椋の實と、赤土とを、授けますと、大國主神は其木の實を嚙み、又赤土を含んで唾吐きしかば、父神は、眞に、蜈蚣を嚙み殺した事と思ひ、其勇氣に感じて、其夜は、其儘皆々臥床に入られた。

夜は深々と更けわたり、草木も眠る丑滿つ頃に、大國主神は密と、父神の室に入り、其熟睡せるを覗き、髪を椽毎に結び着け、大磐石を戸口に塞ぎ、妃の須勢理媛を負ひ、父神の弓矢大刀琴など、竊み出して逃げやうとしたが、生憎にも、琴が樹に觸れて鳴つた爲、素戔嗚尊、目を醒し、驚いて跳ね起きしに、其勢にて、室は引繰りかへつた。不思議に思ひて、見廻ますと、髪は椽に結はひ付けられて居た。之を解かんとて、まご〳〵して居る間に、大國主神等は遠く逃げ延びられた。

さて、素戔嗚尊は後より追つかけて、黄泉平坂に至り、遙向に、大國主神を見、大音聲にて呼はり、「貴樣の持てる弓矢大刀にて、兄弟を、山の坂、又は、河中に追つ拂ひ、大國主神となり、顯國魂神となり、我女を正妻とし、宇賀山の麓に底つ石根に、宮柱太知り建て、高天原に、千木高知りて居れよ。貴樣、こら、善いか。」と、仰せられた。宇賀山は、出雲國飯川郡出雲御崎山が、即、其地であると云ふ。

大國主神、城郭を、城名樋山に構へ、諸兄弟を征伐し、宣ふには、「我兄弟の、我須賀の宮居近く立寄るを許さず。」と、其追ひ及きし處を來次と云ひ、其梁を立てゝ射し處を、矢代、其矢を立てし所を矢内と呼びましたが、其地は、皆大原郡にあるよし、出雲風土記に見えてをりま

す。

こゝたくに集ふ兎が友見れば鰐欺きし神代しおもほゆ　本居宣長
大穴牟遅生大刀弓矢得ましてぞ大國主の神とならしゝ　本居大平
天っ神國っ社を祝ひてぞ我葦原の國は治る　後宇多天皇
民のため世の爲祈る神わざの繁き御國は尙ぞ榮えむ　度會常良
八雲たつ出雲の神をいかに思ふ大國主を人はしらずやも　本居宣長

一〇　國作大神

大國主神、既に、諸兄弟を平げて、出雲の美保埼に居られた時、白波の花と碎くる遙か沖の方より、天羅摩船に乘り、鷦鷯羽を着、此方を指して來る、小い神があつた。其名を聞いても云はず。又大國主神の從者に尋ねても知れんので、偖々不思議の神だと、思つてをられると、其時、蟾蜍が傍にありて云ふには、「久延彦に聞かれたら、屹度分りませう。」と。そこで、早速、其神を呼んで尋ねると、「これは神皇產靈神の子、少彦名神であります。」と、答へた。念の爲、此神を連れ行き、神皇產靈神の許に至つて、問ひ合した處、果して、「我子である。子の中でも、小さかつたので、手の俣より漏れ出た子である。汝、大國主神と兄弟とな

り、其國を作り堅めよ。」と、仰せられた。さて、此少彦名神を紹介せし久延彦は、今も猶、田舍などの山田にある、曾富騰(卽案山子)の事で、足は立たないが、じっとして居て、天下の事を、何んでも知らぬ事はないと云ふ、不思議な神である。

後、大國主、少彦名の二神は、同心協力して、此國を經營したので、其事業は頗多いが、今其重なる事の一つ二つ申しませう。天下の人民及び獸類の爲に、病を療し、又溫泉に浴することなども敎へられた。伊豆、箱根、道後の溫泉などは、其發見に係る者だと傳へられてをるが、此事から、各處の溫泉に、善く、此二神を祭つてあります。又鳥獸昆蟲の災異を除かん爲に、禁厭の法をも定めたので、天下の人民が、大層、其恩惠を蒙ったとも云はれ、又二神が始て酒を造りしより、少彦名神を久斯神と唱へてをる。久斯は酒の義にて、今酒の事を御酒と云ふは、此久斯の語の約つた酒に、御をそへたのである。

二神は、斯の樣に、國土の經營に盡力されて、大功があつたから、其傳說も中々澤山あるが、其一を述べませう。二神が、或時、播摩國神前郡塑岡に居られた時、御互に爭論されたことがある。其咄は斯うだ。土を擔って遠く行くと、糞を垂れずに遠く行くとは、何方が辛からうとの問題の出た時に、大國主神は、「吾は糞垂れずに行かう。」と、云へば、少彦名命は、「それでは、吾は土を運ぼう。」と、遂に二神は競爭を始めたが、五六日駈けると、大國主神は、「もう、吾は駄目だ。とても行かれない。」とて、立ち止まるや否や、直に大便をされた。少彦名神も、矢張苦しかつたと見え、苦笑して、「吾だつて、溜らなかつた。」とて、今迄我慢して持

つて來た土を、どつかと、此岡に落した。それで塁岡と云ふ地名が起つたのである。又便用の時、其處にあつた笹が、其大便を彈き上げて衣物を汚したから、其處を波自加村と云ふのである。又其土と糞とは、石となつて、後世まで、殘つてをると、古本に見えてをるが、今もあるかどうか分らぬ。

兎に角、此二神が、出雲より始て、山陰山陽の諸國を經略して、我國に大功業のあつた事は事實である。或時、大國主神が、「吾等の國土經營の大責任は、果して成就せりと云はれやうか。」と、云はれた時、少彦名命は、「いや、成就したようでもあり、まだ成就せぬようでもある。」と、答へられた。云ふ意は、全く成就したとも云はれ難いから、今一層の奮發を望むとの事であらう。二神嘗て志都の岩屋に居られたが、其遺跡は、今も石見國にあると傳へられてをる。

其後、少彦名神は、出雲の熊野岬に到り、常世國に行つたと云ひますが、夫は何處の事やら、能くは分らんが、先づ外國の事であらう。又或る説には、伯耆の粟島に至り、粟茎に乘つた所が、軀が小さくて、輕い所から、彈がれて、常世國に渡つたとも傳へてある。さて、此からと云ふ者は、大國主神は俄に心細くなり、「吾獨りで、何んで、此國を作ると出來やうか。誰か、吾と協心同力する神がなきか。あゝ。」と、嘆かれた。其時、怪しき光を放つて、海を渡つて來た神があつた。「吾は、汝の幸魂奇魂なり。善く吾を祭らば、汝と共に、國を造らん。さなくば、恐くは、國成り難からん。」と、云はれるので、大國主神、重ねて、「さらば、いかにして、祭らばよきや。」と、問はれた時、「吾を大和の青垣山の上に祭れ。」と、答へ

られた。これ、即、大和國磯城郡三輪町に鎭坐せる、官幣大社大神神社の起源である。

大國主神の功勳が、莫大なので、大名持とも、顯國玉とも、大國玉とも、國作大神とも、又其英武の處から、八千戈神とも、葦原醜男神とも云ひて、其御名頗多く、又其御子も、數多きが、其中で、最有名なのは、八重事代主神・建御名方神・味耜高彦根神・賀夜奈流美神などである。

大汝少彦名のいましけむ志都の石室は幾代へにけむ　生石眞人
大穴牟遲少名御神のよろしくも、造りかためし大八島國　本居宣長
みしめ行く、三輪の杉村ふりにけり、これや神代の印なるらむ　藤原定家

一一　中國平定

天照大神は、天忍穗耳尊を大層可愛がられ、此豐葦原千秋長五百瑞穗國を此尊に治めさせやうとの御考で、此尊を天降されることにされました。この、豐葦原千秋長五百瑞穗國とは、我大八洲國の別名で、千五百年も、長く久しき秋かけて、みづみづしい稻穗の實る國と、賞めた語でありませう。

さて、尊は、天浮橋に立つて、此國の情狀を御覽なされた處、何んだか、大層騷がしくあるから、天に戻りまして、この事を大神に報告をされますと、大神は、高皇產靈神と御協議の上、八百萬神を、又天安河に召集して、「此葦原中國は、吾子の治めん國なれば、忍穗耳尊を天降

しゝ所、惡神共横行して、大騷のよし、途中より還りて報告に及んだ。怪しからぬ事だ。誰か征伐する神なきか。」と、諮問された。諸神、皆、「天穗日命こそ、至極適任でありませう。」と、申し上げたから、早速、命に此大任を負はした。所が、命は何した者か、中國に行つて、大國主神に媚び詔つて、三年待てども、一向に、何の音沙汰もありません。仕方がないから、別に、其子大背飯三熊大人を派遣した所、之亦、何の便もありません。今度は、思兼神の計ひで、天津國魂神の子、天稚彦を遣し、弓矢を賜はりました。然るに、揃ひも揃うて、此神も亦、中國を得んの野心ありてか、大國主神の女、下照媛を妃とし、八年經つても、何の返事も致しません。其次には、雉をやつて、八年經つても、復命せざる理由を、天稚彦に詰問させる事にした。雉は畏りて、天より一直線に飛び降り、天稚彦の家の門前なる湯津楓（タヂの木）の梢に止つて、委しく天神の詔を傳へた。其時、天探女、此鳥の鳴音を聞き付け、天稚彦に、「彼鳥の鳴音が惡いから射殺されよ。」と、勸めた。そこで、天稚彦は、兼て天神より下された弓矢で、其雉を射殺した所、其矢、雉の胸を射徹し、逆に射上りて、天安河原に居られた天照大神・高皇産靈神の所に届いた。高皇産靈神、其矢を改め見た所、矢の羽に血が附着いて居たが、尚よく見ると、疑もなく、嘗て天稚彦に賜はつた者なので、「若、天稚彦が、我等の命を奉じて惡神を射た矢ならば、天稚彦に中るな。又、さうでなく、天稚彦、邪心あつたならば、此矢に中れ。」と、今來た矢の穴から、射返しますと、丁度胡床に寢て居た天稚彦に、甘く中りて死にました。之より世に反矢を忌むとしてある。

天稚彦は敢なき最期を遂げたが、遺族、殊に其妻の下照媛の愁嘆は、中々で、餘所目にも氣の毒に思はれた。此時、親友の味耜高彦根神が、天稚彦の喪を吊ひに、天に昇つて行つたが、一體、此神は、天稚彦に、其容貌が善く似た神だから、遺族共は、此神を見て、手足に取り懸りて、「我子は死なゝかつた」。「我君は生きて居た。あゝ嬉しい」。などゝ、喜極りて、果ては遺族共俱に泣くと云ふ騒、高彦根命は飛んだ迷惑をし、怒り出して、「我は親友の御吊ひに來たのである。如何なれば、吾を死に汚れた者と見違ふぞ。」とて、劍を拔いて、其喪屋を切り伏せ、其上足にて、どんと、蹶やつたが、夫が落ちて山となつた。美濃國藍見河の上の喪山は、此だと云つて居る。

斯の様に行く神も、行く神も、一向成績がないのでは、餘程困つた。

高皇產靈神、更に諸神と愼重に協議して、派遣すべき神の詮議に懸つた時に、皆「磐裂・根裂神の子、磐筒男・磐筒女の生める經津主神ならば、適任疑なし。」と、云へば、天石窟に住める神の甕速日神の子、熯速日神、又其子の武甕槌神、進み出で「いや〳〵、經津主のみ、獨り勇者で、吾の、勇者でない理由はない。吾も一緒に出征せん。」と、自を推薦したので、さらばとて、此二神を遣して、葦原中國を平定さする事に一決された。

二神は、大に勇み立ち、さて天降つた所は、出雲の伊那佐之小濱（○簸川郡）で、二神十握劍を引き放ち、地に立てゝ趺坐して、大國主神に尋ねるには、「天照大神が、高皇產靈尊の命令で、大神の御子を、汝の管轄せる葦原中國に降し、君臨さする都合になつて居る。汝、尋常に、御子に領

土を悉皆譲らるゝか、何うだ。何とか決答せよ。」と聲を揃へていふと、大國主神、「之は、中々重大な事で、吾一人の所存では、御答申し兼ぬる。子の事代主とも、篤と、相談の上、何分の御挨拶を申し上げん故、暫し待たれよ。」と答へた。此時、其の子事代主神は、魚漁に、三穂崎に行つて、こゝに居りませんから、二神、早速、其部下の天鳥船を遣して、事代主神を呼び寄せ、父神より、委細相談さした所、物事の道理を善く辨へた神であるので、「恐れ入りました。早く、此國を天神の御子に御上げなさい。些とも異存はありません。」と、父神に云ひて、遂に其姿を隱された。何處で終られたか、其處がとう〳〵分りません。世に、此神が、船に泛びて東に來られ、遂に伊豆國三島町に祭らるゝ事になつたと傳へてゐます。官幣大社三島神社は、今では此神を祭神として有ります。

健御雷神經津主神

大國主神には、此の他に健御名方神と云ふ子がありますが、中々武勇の方で、二神の天降りと領土獻上の事とを聞き込みまして、憤慨に堪へず、大石を輕々と手先に捧げて、來て云ふには、「誰だ、我國へ來て密々物云ふ者は。我と力競べせよ。

先、貴様の手を捩ぢってやらう。」と、やつと叫んで、武甕槌神の手を捉れば、不思議や、其が、劍の刄になつて、始末に終へません。次に、武甕槌神が先方の手を取ると、まるで未だ若い葦の如くに捻まれた。其剛力に到底も叶はないと思つたか、健御名方神は一目散に逃げ出した。二神はそれ追へとて、追蒐け追蒐け、信濃の諏訪湖近くまで行た時、健御名方神は勢窮り、遂に降參し、「命丈は免されよ。此處より何處にも行かじ。吾父や兄の如く、此中國を天神の御子に獻上することには、謹んで服從する。」と、眞に悔悟の狀が見えたから、之を許してやつた。此緣故から、信濃國諏訪郡、中洲村字神宮寺に、上社ありて、此神を祭り、又下諏訪町には、下社ありて、妃八阪刀賣神を祭り、並に、諏訪明神として、官幣中社に列せられ、武神として、世人の尊敬盛んである

との事である。

葦原の、瑞穗の國に、千早ぶる、神むけよとてそ、天降しける　　秦　敦光

天のほひ、うけひもしなく、あれまして、神のいさをと、なりにけるかな　　秦　敦光

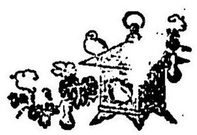
天神、八百萬とは、いふなれど、天稚彦の名こそ高けれ　　藤原利博

唐衣したてる姫の妻戀ぞ、あめに聞ゆるたづならぬ音は　　源　當時

久方の、天の探女が、石船の、泊てし高津は、あせにけるかも　　角麿

諏訪の海や、神の誓の、いかなれば、秋さへ月のこほりしくらむ　　宗良親王

皇孫に、やしまをさりて、波の上の、青柴垣に、旅居するかな　　藤原佐高



一二　出雲大社

かくて、武甕槌・經津主の二神、難なく健御名方神を征服して、凱旋し、大國主神に申さるゝには、「汝が二子、孰も我に降參した。汝の心はどうだ。」と、大國主神は、「二子の承知せる以上は、無論何とて異存あるべき。此葦原の中國は、仰のまゝ、謹んで、天神の御子に獻上せん。唯我宮を、天神の御子の宮の様に、底つ岩根に宮柱太知り建て、高天原に千木高知りて、御造營あらば、吾は此より、此世の事を、一切打ち棄てゝ隱居せん。又、我數多の子も、天神の御子に、末長く仕へ奉りて忠勤を勵まん。」と、答へ申して、出雲國多藝志之小濱（今の簸川村武志村）に御殿を作り、櫛八玉神を料理人として、食物を皇孫に上らせた。其時、此神、鵜となりて、海底に潜り、泥を咋ひ出で、之にて種々の平瓮を造り、又海布の莖を苅りて臼とし、海蓴の莖を杵として、火を鑽り出し、祈禱して、「此吾が鑽れる火は、高天原には、神皇產靈神の宮殿の煤烟の盛に起るまで、又地の下にては、底の磐根の如く固るまで燒き、又千尋の栲繩を延ばして、海人の釣る鱸を、大騷にて引き上げ、簀竹の撓む程に數多の御肴を獻らん。」といはれた。

二神は、一旦、天に上り、中國平定の有様を、委細に復命した。高皇產靈神は、大に其功を賞し、又二神をして、大國主神に、曰はしむるには「汝が云ふ所、如何にも尤なり。汝が住むべき天日隅宮は、柱は高く太く、板は廣く厚く造らせん。又田地も寄附せん。又海や河に遊幸の爲め、橋梁船舶も造りやらん。又天安河に橋を架し、又楯をもつかはさ

ん。又天穂日命をして、汝に仕へさせん。又汝は國神の女を妃として
は信用できにくいから、吾が女三穂津姫を、汝に賜ふにより、汝よく
八十萬神を率ゐて、永く天神の子孫を護るべし。」と、かゝる有難き御
諚に、大國主神は感涙を催し、奉答さるゝには、「仰事慇懃にして、感佩
に堪へず。我何ぞ違背せんや。吾は隱事を治めん程に、天孫は顯事を
治め奉れ。」とて、不斷其身を離さぬ、秘藏の廣矛を、二神に讓りて、さて
申さるゝには、「吾れ此矛にて、天下を定めたり。天孫も亦此矛を御用
ひあらんには、國土自然と治り平がん。」と、又岐神をも推薦して、「此よ
く我に代りて仕へん。」と、言ひ終りて、日隅宮に隱れられた。其神社は
即出雲國御崎山の西の麓にある。これより以前、淤美豆奴命が、出雲
國は餘り狹くて小さいからと云ふので新羅國より、國を引つ張り

來て、くっつけた後に、大國主神の宮を作らんとて、諸の神達を參集し
て、築きしより、其所を杵築と云ひ、其結構が、頗壯麗偉大であつたの
で、世に之を出雲の大社と云つてをる。今の官幣大社出雲大社が、即、
之れである。

さて、天穂日命は、前に述べた通り、大國主神の處に行ったきり、何の
音沙汰もせぬ樣だが、其家に傳れる神賀詞には、此命、初に觀國の爲、
遣され、大國主神の心を和げ樣としたけれど、ぐづ〳〵して決しな
いから、三年の後に其趣を復命した。そこで更めて、天若日子神を遣
して穩便に降參せしめ樣としたが、此命、大國主神に降つたから、最
後に武甕槌神を征討將軍とし、穂日命の子天夷鳥神を招撫使とし
て、派遣されたとある。天穂日命父子が武力を用ひず、溫和手段で此

國を天孫に上らせやうとした苦心は、實に想像するに餘ある。兎に角、此命が、後で此神社に仕へ奉れと命ぜられた事から、考へて見ても、其家に傳はつて居る神賀詞の事實が、確であらうと思はれる。後に、天夷鳥命は天神の詔を承けて、天降り、大國主神に仕へたによつて、其裔は、世々出雲國造として、毎年朝廷に參つて、神賀詞を奏する例となつた。今の千家・北島の兩家は即其後で、紀伊國造の後裔と云はるゝ紀家と共に、我國では、最古い家柄である。

初め、大國主神は奏上して、「大和國は、これ、皇孫の鎭り坐さん所なり。」とて、己が和魂を、八咫鏡に託して、倭大物主櫛瓊玉命と稱して、大三輪に居らしめ、其子味耜高彦根命をして葛城の鴨に居らしめ、事代主神をして宇奈提に居らしめ、賀夜奈流美命をして飛鳥に居らしめ、以て皇孫近衞の神となした。其忠誠の心は眞に至れりと謂ふべきである。此等は夫々今の大和國磯城郡三輪町三輪山鎭坐の大神神社、仝國南葛城郡葛城村大字高鴨字神通寺の高鴨神社、仝國高市郡雲梯村の加夜奈留美命神社、又仝國仝郡飛鳥村鳥形山の飛鳥神社である。

さて、其後、武甕槌、經津主の二神は、岐神を案内として、諸處を巡回し、建葉槌命をして、惡神香々背男を討たしめ、不順者を懲らし、歸順者を賞し、事代主神以下諸神を率ゐて、天上に昇り中國平定の狀を、悉しく天神に奏聞しました。

二神の東國經營の緣故により、經津主神は下總國香取郡香取町に香取神宮として、武甕槌神は常陸國鹿島郡鹿島町に鹿島神宮と

して祭られ、武神として、古來朝野の尊崇頗厚く、並に官幣大社である。

國ひけし矛のさきより傳へくるみたまのふゆは今日ぞ嬉しき　矢田部公望

葦原や天照る神のみこと受けて國平げし神ぞ此神　兼好法師

かとりのやいつのほこ杉風吹けば神の雄詰今も聞くごと　伊能穎則

香取潟千重のしほせをせきあげて浪穂にたてる神の御門かも　加茂眞淵

一三　天孫降臨

葦原中國が、悉く平定したによつて、天照太神、高皇產靈神と計り、其太子、天忍穗耳尊を降して、此國を治めさせやうとされました。然るに、是より先、忍穗耳尊は、高皇產靈神の女萬幡豐秋津姫を娶られて、天火明尊・天津彦火瓊々杵尊の二子をあげられました。天照大神は、非常に、其御孫の瓊々杵尊を可愛がられ、父尊に代へて、此天孫を降して、中國の主となされました。此時、天照大神は、天孫に、八阪瓊曲玉・八咫鏡・叢雲劍の三種の神器を授けられて、天日嗣の御璽とし、更に思兼神・天手力男神・天石門別神を副へられ、中臣の祖神なる天兒屋命、忌部の祖神なる太玉命、猿女の祖神なる天鈿女命、鏡作の祖神

なる石凝姥命、玉作の祖神なる玉祖命の、凡五伴緒を御供に配し、天降らしめました。そこで、皇孫に勅して宣はるゝには、「此葦原の千五百秋の瑞穂國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫就きて治めよ。天つ日嗣の隆えまさんこと、天地と共に窮りなかるべし。」と、特に御鏡を持たれて、「此鏡は、全く我魂同様に心得、吾前を拜するが如く、齋き奉れ。」と、仰せられました。

かくて、瓊々杵尊は、大神の慈愛籠れる詔を畏み、御座なる天磐座を離れられ、天八重雲を押し分け押し分け、道を排いて、此葦原中國を指して降られました。天忍日命・天津久米命の二神は、天石靫を負ひ、頭槌の太刀を取り佩き、天波士弓を取り持ち、天眞鹿兒矢を手挾み、天孫の御前に立ちて、先驅の役を承り、五伴緒の神達は、二十五物、部を率ゐ、武器を帶びて前後を警衛された。其樣如何にも、莊嚴を極め、威儀誠に堂々たるものでありました。

暫して、先驅が、息を切つて驅け戻り、注進して曰ふには、「天八衢に、容貌、世の常に異れる神がをります。其鼻の長七咫、背の長は七尺餘、且口も尻も皆照り耀いて、丁度八咫鏡の如く、其赤きことは赤酸漿に似てをります。」と、そこで從者をして問はしめると、孰も其見るから堂々たる威容に氣厭れ、問ひ得る者が一人もなかつたのは、返へす返へす殘念と云ふべきである。時に天岩窟隱の時に、大功のあつた天鈿女命が進み出で、「吾此大役勤め終ふせん。」とて、又例の如く、胸乳を顯し、裳帶を低く結び、げら〳〵と笑つて、其神に向ひ立つと、衢神問うて曰ふには、「天鈿女命よ、汝の狀態は何の爲ぞ。」と、然るに天鈿

猿田彦

女命は之に答へざるのみならず、反問さるゝには、「天照大神の御子の出でます道に居るは誰ぞ。」と。「天照大神の御子、今や天降りますべしと聞き、奉迎の爲に、此處にて待ち上ぐるなり。吾こそはこれ猿田彦大神。」と、云ふと、天鈿女命、更めて問ひ返さるゝには、「汝、我に先

だちて行くか、又、吾、汝の先になりて行くべきか。」「吾、先づ皇孫の爲に案内し奉らむ。天神の子は、筑紫の日向高千穗槵觸峯に到るべし。吾は伊勢の狹長田五十鈴川の上に到らむにより、汝、吾を送り給へ。」と、云へば、天鈿女命還りて、逐一有りし次第を復奏された。

かくて、皇孫は、先づ日向の高千穗の槵觸峯に天降り、巡り巡りて、吾田長屋笠狹之碕に到られましたが、其處に、國神、事勝國勝長狹神がをられた。一名を鹽土老翁と呼びて、伊弉諾尊の子と云ひます。此神が來り奏して、國土を悉く皇孫に献ることを請はれた。皇孫詔して、「此地は、韓國に向ひ、朝日の直指す國、夕日の日照國にて、頗善き地なり。」と、申されて、中々の御機嫌にて、莊嚴なる宮殿を造りて御住になられました。此の高千穗の槵觸峯とは、今の何處に當るか、古來種

々の諸説がある。或は、日向國臼杵郡なる、今の高千穗村にあるともいひ、又大隅國姶良郡にある、霧島山が此であるとも云つてをるが、確とは分らぬ。又笠狹之御碕は、薩摩國川邊郡加世田ならんとの説がある。さて皇孫は、天鈿女命に向はれて、「前に眞先に立つて、吾等に仕へ奉れる猿田彦神をば、汝、送り奉り、又其神の名を、汝、以來汝の家に付けて、朝廷に奉公せよ。」と、申されました。これが、天鈿女命の子孫は、男女に限らず、猿女君と稱へて、朝廷に仕へた起原である。

猿田彦神は、天鈿女命に送られ、伊勢に還りて阿邪訶（○伊勢の國壹志郡）と云ふ地に住みける時、比良夫貝（○月日貝の事）を漁りしに、手を咬へられて、海に溺れたと云ひ傳へてをる。

又、天鈿女命が猿田彦神を送つて、伊勢に到りし時、悉く鰭の廣物・鰭の狹物（大小の魚の義）を呼び集め、「汝等、天神の御子に仕へ奉るか」。と、問ひしに、孰も異口同音に、「畏りぬ。」と、答へたが、唯海鼠のみ、何の返答もしない。命、此口、物云はぬ口。」と、云ひて、紐ある小刀にて、其口を拆きしため、海鼠の口は、此より拆けたと傳へてをる。又此より以後は、神樣を祭らん料に、志摩國から、魚貝を早贄にと獻上する時には、猿女君等に頒け賜はるのは、此理由に因つた者だと云ふことです。

天孫は、一先づ落ち付かれたので、皇祖や諸神を祀らんとて、夫れ夫れ準備をされました。天兒屋命は、天神の仰に從ひ、悠紀・主基二國を定め、供奉の官員を定め、新穀を齋庭に供へ、齋戒沐浴の上、黑白兩色の御酒を釀し、新穀にて炊ける飯を、天神に上り、歌人に歌を奏さしめ、語部に古傳說を語らしめた。これが神嘗祭の起で、後世の大嘗

祭の始である。後に、卽位後、始めて行はるゝ神嘗祭を、大嘗祭と云ひ、御一代一度の最も重い祭祀とせられてある。明治の今日にも、尙、古禮を守らせられ、明治四十二年二月十一日に發布し給へる登極令にも、委しく、此祭を規定せられたるは、最も畏いことである。

かくて、皇孫は、寶鏡を奉じて、殿を同くし牀を共にし、朝夕暫くも、玉躰を御離しになられない。これ天照大神の御靈代として伊勢に祭らるゝ大神宮である。又天石門別神は、又の名を、豐磐間戸、櫛磐間戸神と申して、御門之神となり、天手力雄神は、佐那縣の神となり、猿田彦神は宇治土公の祖となり、其他の諸神も、皆子孫相承け、朝廷に仕へて、朝政を輔翼し、皆先祖の業を繼いたので、祖神は、其功勞により、孰も朝廷より、祭らるゝ事が、今に至る迄、渝ることがない。

神代より、三種の寶傳りて、豐葦原の、しるしとぞなる　藤原敎良
久方の、あめの八重雲ふりわけて、下りし君を我ぞ迎へし　紀淑望
天つ久米、天の忍日の、二神の、とらしゝ弓は、天の波士弓　本居大平
頭推の、横刀とりはきて、御天降の御前仕へし大伴の神　本居大平

一四　人命夭折

皇孫瓊々杵尊は、愈笠沙之碕に宮居されたが、或日、其海濱に遊幸されしに、窈窕たる一美人に遇はれたので、「汝は誰なるか。」と、問はせられた。「妾はこれ、大山祇神の女、名は神吾田鹿葦津姫とも、又は木花開耶姫とも申す。又吾姉には、磐長姫おはす。」と、答へられると、皇孫は、更に、「汝を妃となさんには如何に。」と、問はせ給へば、「妾には、父大山祇神いませば、願くは父に尋ね給へ。」と、答へ申す。よりて、重ねて皇孫より、大山祇神に請はせられると、何んで不服があらう、却つて、非常の滿足で、其二人の女に、多くの飲食物を持參させて、皇孫に奉られた。然るに、姉の磐長姫は、世にも稀なる醜婦であるので、皇孫は、之を御

戻しになり、唯妹の木花開耶姫のみ御留めになられた。

大山祇神は、其長女が送り返されたのを、遺憾に思はれ、大に耻ぢて、皇孫に申し送れる樣、「そも、吾の二女を奉れる故は、磐長姫を遣しては、天神の御子の壽命、雨降り風吹けども、其永久なること、磐石の如く、常磐堅磐に、榮えませとの意、又木花開耶姫を遣しては、木の花の榮ゆる如く、榮えませと、祈りし爲なり。然るに、何事ぞ。今、磐長姫を戻されて、唯獨り木花開耶姫のみを留め給へること。さらばこれよりは、天神の御子の壽命、木の花の如くに、忽に移ろひ衰へん。」と、あつた。代々の天皇の命長からざるは、全く此時に基くと云ふことである。又一説には、此時磐長姫、大に耻ぢ怨みて哭かれ、「天下の人民は、木の花の如くに、暫くにして移ろひ衰へん。」と、云はれしより、世の人の

命が短くなつたとも傳へられてをる。

さて間もなく、彼の木花開耶姫は、姙娠せられたが、皇孫に、「妾、天神の子を私に產むは畏れ多し。」と、申し上ぐれば、「これ、恐くは、我子にあらじ。必國神の子ならん。」と、宣はれしを、姫は、此上もなき、耻辱と思はれて、御怨み申さるゝには、「若、妾の姙める子、國神の子ならんには、生るゝとき、安かならざるべし、若天神の御子にまさば、無事に、恙なからん。」と、念じ、戸の無き八尋殿を造り、其中に入り、土にて、どこもかも、悉皆塗り塞ぎ、今や御生みにならうと云ふ時に、火を其殿にかけました。姫の意では、若、此疑が晴れずは、假令焚け死ぬとも、苦しからずと、覺悟されたであらう。と見るまに、火は、焰々として、天を焦したが、其火中より、先づ生まれさせられたは、火照尊にて、隻人阿多君の祖である。次に生まれさせられたは、火酢芹尊、次に御生まれになられたが、火折尊、又の名天津日高彦火々出見尊であらるゝ。其時母君は盛に燃え出す、火炎中より、宣はるゝには、「妾が生める兒も、又妾が身も火難には少しも損せざるを、天孫親く御覽あれや。之にても、まだ疑ひ給ふか。」と、皇孫、「吾、初めより、無論吾兒なりと知れるも、世人のおもはくを恐れ、故意に疑へるなり。かくして、皇子は、吾兒に相違なく、汝にも、亦靈異なる威德あり、吾兒にも、亦絶倫の力あるをば世人に知らしめん爲ぞ。」と、答へ奉る。女の淺墓なる心より、かゝる深き御考あらんとは、夢にも知るよしなきを、媛は今更の樣に慙ぢられたとの事であります。

初め、皇子の生れし時、竹刀にて、其臍帶を切りて棄てられしに、終

に、根生えて、竹林となりし故、其地を竹屋と名つけた。薩摩國阿多郡に、其地あると云はれてをる。

暫くありて、皇孫瓊々杵尊御崩御になりましたから、日向の可愛山陵に葬りました。其地は今明かではないが、或る一説には、今の薩摩國薩摩郡水引村大字宮内としてある。其處には、今現に、國幣中社新田神社があつて、此尊を祭てある。又木花開耶姫は、櫻大刀自神と稱へ、淺間神社として、駿河國富士郡大宮町にある、官幣大社、靜岡市宮崎町字賤機山の國幣小社、及び甲斐國東八代郡一櫻村にある國幣中社に祭られてをる。

すべらぎの治まる御代を思ふにも國常立の末ぞはるけき
いざなぎの尊の時に、定めてき我君久に世にまさんとは

權律師謙忠
藤原仲實

一五　海幸山幸

瓊々杵尊の長子、火照尊は、海幸として海の色々の魚を捕ること、末子火折尊は、山幸として、山の色々の獸を捕るを業とせられた。然るに、或時、御兄弟が約束して、各其山と海との道具を換へて、漁獵を試みられたが、孰も其獲物がないので、兄尊は、早速弓矢を、其弟尊に戻して、己が釣鉤を促りしに、弟尊は、生憎釣鉤を失はれたから、詮方なく腰に佩ける十握劍を以て、數多の鉤を作られ、箕に一杯盛りて、之を兄尊に償はれたが、中々に承知されず。是非に、元の鉤其まゝそつくりなものを戻せとて、非常に催促された。火折尊も、之には殆閉口されたさて如何にもしやうがないので、憂ひ悲しみ、顏色やつれ果て、

何處ともなしに、漫行して、海岸に到られたが、不圖、雁が絹に罹つて困んで居るを見られ、可哀想な事よとて、絹を解き早速雁を放つてやりました。すると忽ち、頭には白妙の雪を戴いてをるが、顔は光澤光澤して、まだ壯夫の如き一老翁が杖を突いて此方へと、のそりのそり歩いて來た。尊、「汝は誰である。」と、問ひ給へば、「吾は、これ鹽土老翁なり。尊は、これ皇孫にあらずや。」と、して其泣き悲めるは、如何なる譯にや。語り給はれ。」と、云はれて、尊、包まず有りし次第を、委しく物語られしに、老翁、同情に堪へぬと見え、「泣き給ふ勿れ。吾、尊のために、善く取計はん。」とて、嚢の中より玄櫛を取り出し、之を大地に投げ付けると、不思議や、見る間に忽、蓊蒼たる竹藪となつた。老翁は、其竹を採り、無雜作に無目堅間の小船（○竹を編みて作れる目の無き堅くしまれる船の義）を造り、尊を乘せ奉ると、忽、とある汀に着いた。そこで、船を乘り棄てゝ行くと、海神の宮の前に着いた。見ると大廈高樓巍然として聳え、金銀朱玉を縷め、燦然として、人目を眩ましまだ此世に見た事のない樣である。尊は其壯麗に驚かされ、門内の樣子を覗くと、門前に一の井があつて、井の側に一本の桂の木があつて、枝葉がこんもりと繁げつてをる。これ身を隱すには究竟とて、身を躍して、その樹の上に登られた。處が折惡くも、海神の女豐玉姫の下婢がやつて來て、玉の碗を持つて水を酌まうとすると、井中に何んだか、影が映つてをる。さても、不思議な事と、きつと天上を見上げると、不思議も不思議、立派なる美丈夫が、樹の上に居るのである。尊はきまり惡さに、清水を請ひました。下婢は、玉の碗に酌みて奉れると、尊は、水をば飲まずに、御頸に飾れる玉を取

つて、口に含み、其玉碗に吐き出された。下婢は其玉の附いたまゝ、其碗を豊玉姫に進りしに、姫は、其玉を見て、「若しや、門外に人ありやせぬか。」と、尋ねられると、下婢はありし次第を、一々申し上げた。姫は不思議な事よとて、門に出でゝ、御覽になりしに、成程立派な方が立つてをるので、早速に、此由、父神に訴へられた。すると、父神は、「これ確に、天津日高○天子の稱の御子虚空津日高○太子の稱ならん。畏れ多い事なり。」とて、海鱸の皮や、絹の疊やら、幾枚も敷きつめ、室内を清く掃除して、尊を請じ、色々の饗應をなして尊敬に尊敬を加へて待遇された。

火折尊は、そこで豊玉姫を妃とし、海神の宮に、面白く暮して居られたが、假初と思ひし年月も、春風秋雨、忽に三歳と過ぎた。尊は、不圖鉤の事を想ひ起され、一夜悽然として、長大息されたのを、姫は之れを見て、心配に堪へず。父君に申さるゝには、「かく三年の間、共に棲み給ひしに、未だ一度も、夫の歎きを聞かざりしに、今夜長息せしは、定めて、何か一大事の起りしならん。」と、父神も、さう思召されて、火折尊に尋ねられると、尊は、此時始て、來意を告げて、其助けを求められたから、海神も大に同情を寄せ、海中の大小の魚を殘らず呼び集め、「鉤を盗める魚なきや。」と、問はせられると、皆、「知らず。」と、答へた。然るに其時、一魚があつて、「鯔魚が、此間、咽喉に疾あるので、食物が喉を通らぬと云つて居つた。」と、云ひますので、「さては、其鯔魚こそ怪しい。」とて、早速、之を召し、其喉を探りしに、果して、失へる鉤があつた。海神は嚴重に鯔魚に申し渡して、「汝、鯔魚、今より、餌を呑むな。又天孫の御供物に上るを得ず。」と、云はれた。これ、後世、此魚が供御に進られざる故で

ある。

海神は鉤を奇麗に洗ひ清めて、火折尊に差し上げ、且諭さるゝには、「此鉤を、兄尊に返さん時に、此鉤は、大鉤・貧鉤・滅鉤・落薄鉤と詛らつてやられよ。」と、又潮涸珠・潮盈珠の兩箇を授けて、敎へらるゝには、「若、尊の兄、高田を作らば、尊は、下田を作り、尊の兄、下田を作らば、尊は高田を作られよ。吾、水を掌れば、三年中に、必尊の兄を貧しくなさん。若之を怨みて攻めたる時には、潮盈珠を出して、溺らし、若降參せば、潮涸珠を出して、活しなどして、困しめ給へ。」と、そこで、海神は、悉く鰐魚を呼び集め、申すには、「天孫、今や、上の國に御歸ならんとす。汝等、幾日かゝりて天孫を送り届けらるゝか。」と、云ふと、諸の鰐魚は、孰も其身の丈を計り、其日數を割り出して、思ひ〳〵に返答をした。其中に一尋鰐魚があつて、「吾は一日の中に、確に送り果さん。」と申したから、乃、其一尋鰐に命じて、天孫を、其頸に載せて送り奉らしめ、且海中を渡る時は、吳々も注意して、懼れ給はぬ樣にと、戒めて遣られた。かくして、鰐は期を違へず、一日の中に、天孫を送り奉つたが、其鰐の返らんとせし時に、天孫は其佩き給へる紐小刀を解いて、其頸に著けて與へられた。されば、其一尋鰐魚を、今にも鋤持神と云ふ。

火折尊は、海上平穩に、故殿に御戻りになつて、早速に、海神の敎のまゝに、其鉤を兄尊に返戻されたが、兄尊は怒りて受取られない。そこで、弟尊は潮盈珠を出すと、潮水が自と溢れ來て、見る間に、兄尊は忽に溺れかけるので、其苦しさに堪へず、「吾汝に事へて奴隷とならんにより、命丈助け給へ。」と、云へば弟尊、さらばとて、潮涸珠を出され

た所、不思議にも、今迄並々と溢れた潮水が見る間に退き、兄尊も、ほつと息をして命をとり止められた。喉元過ぐれば、暑は忘るゝ世の習に洩れず。兄尊は、「吾、兄でありながら、何んで弟に事ふる理窟があらうぞ。」とて、又々不遜勝手の擧動があられたから、弟尊、又潮盈珠を出されたので、兄尊は、之を見て、高山に登り、避難されやうとすると、潮水もざぶ〳〵、山に届く様にさし込んできた。これでは溜らぬと、今度は、高木に攀ぢ上りしに、潮水は又々樹に屆いた。尊、今は進退これ窮り、絶躰絶命の姿にて、憐を請ひて曰はるゝには、「今より以來は、吾が子孫、汝の俳人となり、又狗人となり、仕へ奉らんにより、今度こそは許し給へ。」とて、其身を眞裸にして、手にも顏にも、赤土を塗り、足を擧げ調子を合せて、床板を踏み鳴し、溺れ苦む狀を眞似された。其様は、初め潮水が足につく時は、足占をなし、膝に來ると足を擧げ、股に至ると狼狽して走り廻り、腰に至れば腰を捫り、腋に至れば手を胸に置き、頸に至れば、手を擧げ、又は掌を反へすので、其苦悶の狀は、却て抱腹絶倒の觀があつた。弟尊始て、其誠心誠意に憐を請へるを察せられて、御許しになられた。これより其子孫は、永く諸の隻人等を率ゐて、天皇の御垣の傍を離れず、吠狗に代りて仕へ奉るは此爲であると云つてをる。又世人が其失せたる針を催促しないのも、此に基けるとも傳へてをる。

わたつみをいてくましけむ心こそ山幸彦のよめとさへなれ　源泉

波をわけ我日の本を尋ねこしひちりの御代の親にそありける　藤原俊房

鹽土の翁しはかりて釣針も汐の滿ちひる珠もえしめき　本居宣長

一六　高千穂宮

初め、火折尊が海神の許を去らうとされた時、其妃の豐玉姫、天孫に語らるゝ樣、「妾は姙娠の身となりましたが、風吹き、浪高き日に、海邊に到らん程に、産屋を造つて、待たれよ。決して御忘あるな。」といはれたが、果して、風濤烈しき日に、豐玉姫は、其妹玉依姫と共に御出ましになつたから、急に其海濱の渚に、産屋を立て、鵜の羽を葺草として、其屋根を葺きました。然るに、海濱の事とて、蟹、數多這ひ來て、産屋を騷せましたから、天忍人命、箒にて蟹を掃ひて、産屋を守りました。それで後世掃除の職を掃守といふので、天忍人命の子孫が、掃守部となつた。今掃部をかもんと云ふは、蟹守の訛つたのである。

蟹守

さて、其産屋の未だ葺き合へぬ間に、急に御産氣が附いて、姫は産屋に御入になりました。其時、姫は、堅く尊に約束さるゝには、「凡て他國の人は、子を産む時には、其本國の形になつて生む者であります。それで、妾も、亦本の姿になつて皇子を生まう程に、決して之を

見給ふな。」と、いひましたが、尊は其約束を守らず、其産の眞最中に、密と覗いて見ますと、こはいかに、姫と思ひけるは、八尋もある大層恐ろしい鰐魚であつて、よろ〳〵と匍匐つてをるに、尊は、心も氣も消え失せて、逃げ出されました。姫は此事を、如何して知つた者だか、其覗き見られたのを、ひどく心に耻ぢて、其生まれた皇子を、其處に置き、「妾は、常に海路を經て、此國に往來しようと、思ひしに、吾形を覗かれたは誠に耻しい事である。」とて、海陸の通路に當れる海坂を塞ぎ、眞床覆ふ衾及び葺草にて、其皇子を包み、之を波瀲に置き、養育の事を、一切、其妹玉依姫に賴んで、倉皇として海神の宮に戻りました。これからと云ふものは海陸の往來が絶えました。さて、又、其皇子は、かゝる次第によつて、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊と申されました。

豐玉姫は、一旦夫尊の違約を恨み、夫婦の緣を切て、故郷に還られたものゝ、春花秋月懷しさ慕しさの心に堪へ兼ね、思ふ心を歌に詠み、御子を養育せる緣故から、玉依姫の傳手にて、火折尊に上りました。

赤玉は緒さへ光れど白玉の
君がよそひし貴くありけり

と、云ふ意味は、赤玉は、之を貫ける緒さへ照り映いて、誠に立派ではあるが、白玉の樣な吾夫の尊の御樣子の方が、遙に勝りて立派であると慕ひ奉つたのでありませう。

尊も、之を見て、中々哀れと思召し、やがて、

奥つ鳥鴨着く島に我が率寢し
妹は忘れじ、世のこと〳〵に

と、返歌をなされました。云ふ意は奥の島○枕詞の鴨の寄る島、卽海神の宮に、我が嘗て豊玉姫と、寢食を共にせし、その昔の事を想ひ出しては、何時の世になつても、決して、吾妃を忘れないとの事である。

かくて、尊は、長壽にて、高千穗宮にて御崩御になられた。其趾は、今明でないが、大隅國蛤良郡國府村字府中にありとも、又日向國北諸縣郡都城町字宮丸にありとも、云はれてをる。其御陵は、高千穗の西にあつて、高屋山上陵と稱へられてをる。此陵も、諸說がありて、大隅國姶良郡溝邊村字麓ならんとの說があります。今の同郡國府村字府中にある官幣大社鹿兒島神社は、卽尊を祀つた者であります。

其後、鸕鷀草葺不合尊は、御姨の玉依姫を妃とせられ、五瀨尊・稻氷尊・御毛沼尊・神倭磐余彦尊の四子をあげさせられた。さて、御毛沼尊は波浪を超えて、常世國に渡られたとも、又稻氷尊は、母の國の海原に行かれたとも、又は、新羅に渡り、其國王になられたとも傳へられてをる。父尊は、天壽を以て、高千穗宮にて崩ぜられたが、日向國吾平山上陵に葬られたとしてある。其地は、今の大隅國肝屬郡姶良村大字上名でありませう。

五瀨尊、磐余彦尊は猶高千穗宮に居られたが、此處は、餘西に偏りて、大業を恢にするには適せないと云ふので、相議して、東に都を遷さんとて、東上せられた。然るに大和には既に早くより、天神の子と稱する饒速日命が天降つて居られ、土地の豪族長髓彦が恐れ畏みて、之を主君として戴き奉つて居るのである。大和では斯う云ふ風な所に、不圖、西から、五瀨尊等、天神の裔として上つて來た者だから、長髓

彦は、天神に二人ある筈はない、これは僞の天神で、我國を奪りに來た者だらうとて、身の程知らずにも抵抗した。然るに、不幸にも五瀬命は、流矢に中つて、薨去されたので、磐命彦尊が代りて、軍を督し、道を轉じて、背面から攻撃し、大和の賊を平げられ、橿原の宮にて、始て天皇の位に卽かれました。これが、卽神武天皇であつて、第一代の天皇と呼ばれ、皇統今に連綿として、月日と共に絶ゆることがなく、「天地と共に窮りなかるべし。」との、天祖の寶訓が今以て新なるを覺えるのである。嗚呼萬世一系の天子を戴ける我國民は益〻義勇公に奉じ以て、天壤無窮の皇運を扶翼しなければならぬと思はれるから、一通り、我神代の事柄を物語つたのである。

波っ海、波かきわけて顯れし、たけうの尊いく世經ぬらむ　本康親王

契りだに遠へざりせばわたつみの底にも人や行き通はまし　藤原實清

白波に玉より姫のこしことは渚やつひにとまりなりけむ　大江千古

萬代に現っ御神と生まして國しろしめすすめら大君　本居大平

飛びかける天磐舟尋ねてぞ秋津島には宮はじめける　三統理平

神代物語　終

一六　高千穗宮

天皇以天祖之遺體世傳天業
群臣以神明之胄裔世亮天功

德川光圀

附錄

神宮正遷宮拜觀の記

神風や朝日の宮のみやうつし
影のどかなる世にこそありけれ　源實朝

當今第三回の伊勢神宮正遷宮に仕へ奉らんとて、九月二十七日に東京を發し、翌日神都に着き、暫し岡本の里に宿りて、只管齋戒に身を清め、其式日の至るを待ちぬ。其間、徵古館に陳列品を觀、御寶物陳列所に撤下の御神寶を拜し、又舊の林崎文庫の秘書を、神宮文庫

内に繙閲して、身に餘る光榮を覺えぬ。

彌十月二日となりぬ。これ、飛鳥淨見原の朝廷が、始て範を後世に垂れ給ひし、正遷宮の第五十七回目が、擧げ行はるゝ日なり。いつもより早く起き、沐浴例の如く終りて、窓を推し開き眺むれば、秋の碧空拭ふが如く晴れ、瑞々しき滿田の稻穗も、瑞祥を呈せる如く、鼓嶽の孱顏、常よりも、澄みて見られたる、誠に心地よし。食物は常よりも、注意せる身の、今日は一層の注意を拂ひ、やがて、朝餉を濟すにも、いたく心を用ひ、兼て用意せる新調の衣服を携へ、同職の關保之助氏を促し、午前十時と云ふに五十鈴川を渡り、神宮域内に入り、神樂殿向の控室にて、暫時休憩の上、潔齋し、晝餐を終へ、午後三時頃より、一切新調の衣服に更へ、裝束を着けて、徐に其掛の指揮を待てり。

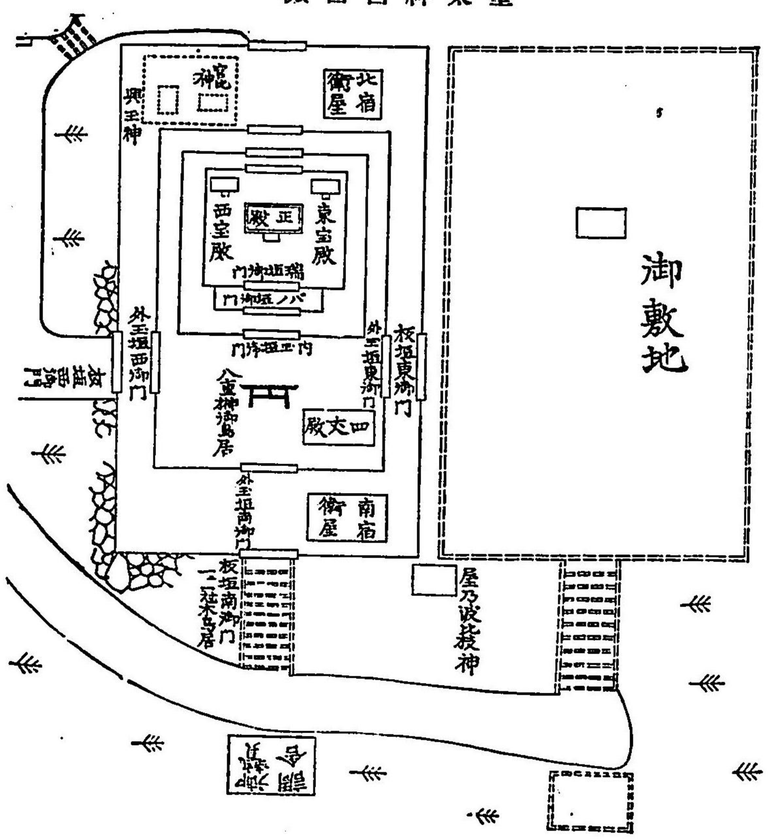
元來、余等二人は、造神宮使廳より、臨時に雜使の役目を拜し、赤絹の單の上に、白の雜色を着し、柳錆の烏帽子を戴き、庭燎を焚けとの事なり。されど、こは單に名目のみにて、其實は、謹みて盛儀を拜せよとの恩典なり。

此日も遂に暮れなんとして、神路山のあなたより、蒼然として鳥羽玉の夜の幕は、徐々に御裳裾川にまで垂れこめられ、刻一刻に曖々たる夜の色は增し、更に森嚴の氣は加りぬ。午後六時に、第一鼓の合圖、蓼々として、神苑内に響き渡れるは、勅使及び祭主以下の祭官諸員の參集せるなるべし。第二鼓の續いて響けるは、祭儀の諸具を辦備せるなるべし。又第三鼓の響けるは、勅使以下の、一大隊の儀仗兵に警護せられて、齋館を出でしなるべし。夫より勅使以下第二鳥居

外に至りて修祓を受けられ、更に玉串行事所に進み、太玉串を受け、本宮に向ひ參進せらる。儀仗兵前後を護衛し、進みて板垣南御門外に至りて、石階の東西に分れて整列す。勅使・祭主以下諸員は、更に外玉垣御門を經て、中重の版に着き、先に受けし太玉串を、內玉垣御門下に奉奠し、終りて後、一同、內玉垣・蕃垣・瑞垣の諸門を經て、內院に參進するの順序とかや申し承りぬ。

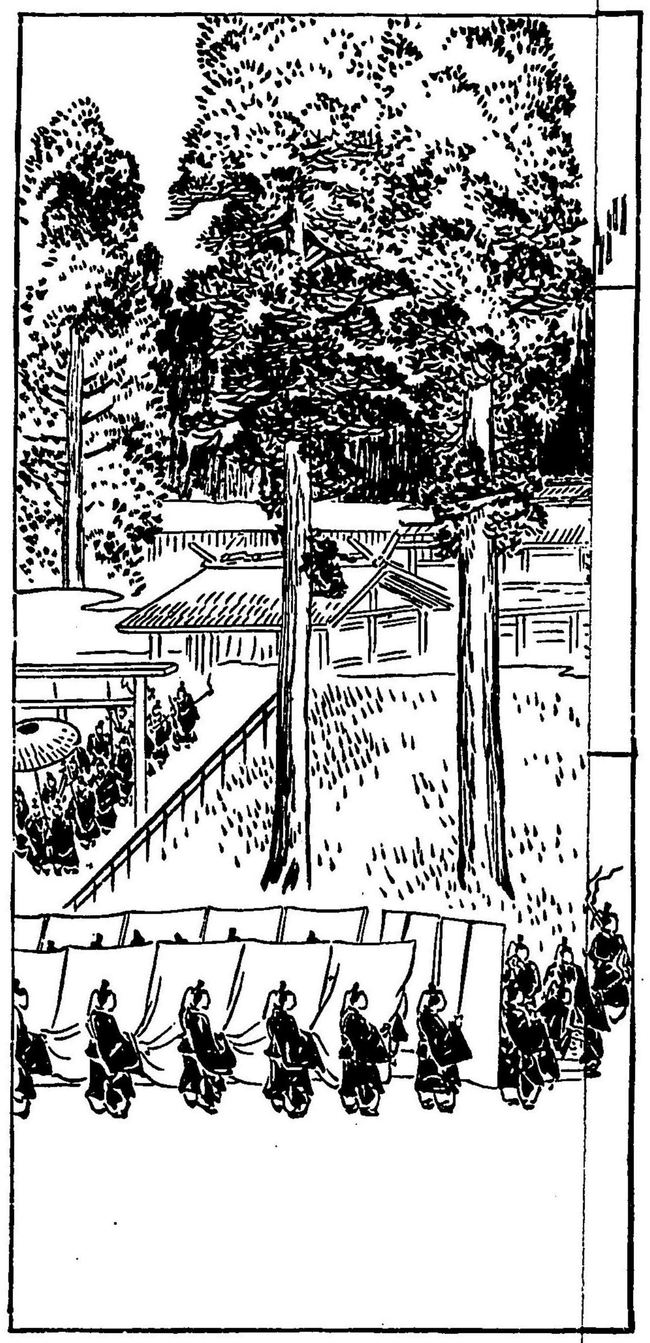
余等は、祭主・勅使・祭典諸員の後に尾して行けとの命に從ひ、關氏と共に徐々に一行の列末に加はりぬ。參詣道の右側は、竹矢來を結はれ、祭官諸員の外、一切入るを止めしかば、柵外は一般拜觀者にて、山を築かるゝ有樣なり。沿道、古杉老檜鬱々として天を摩する所、白丁の三々五々相參はりて庭燎を焚けるも、何となく一段の崇嚴の

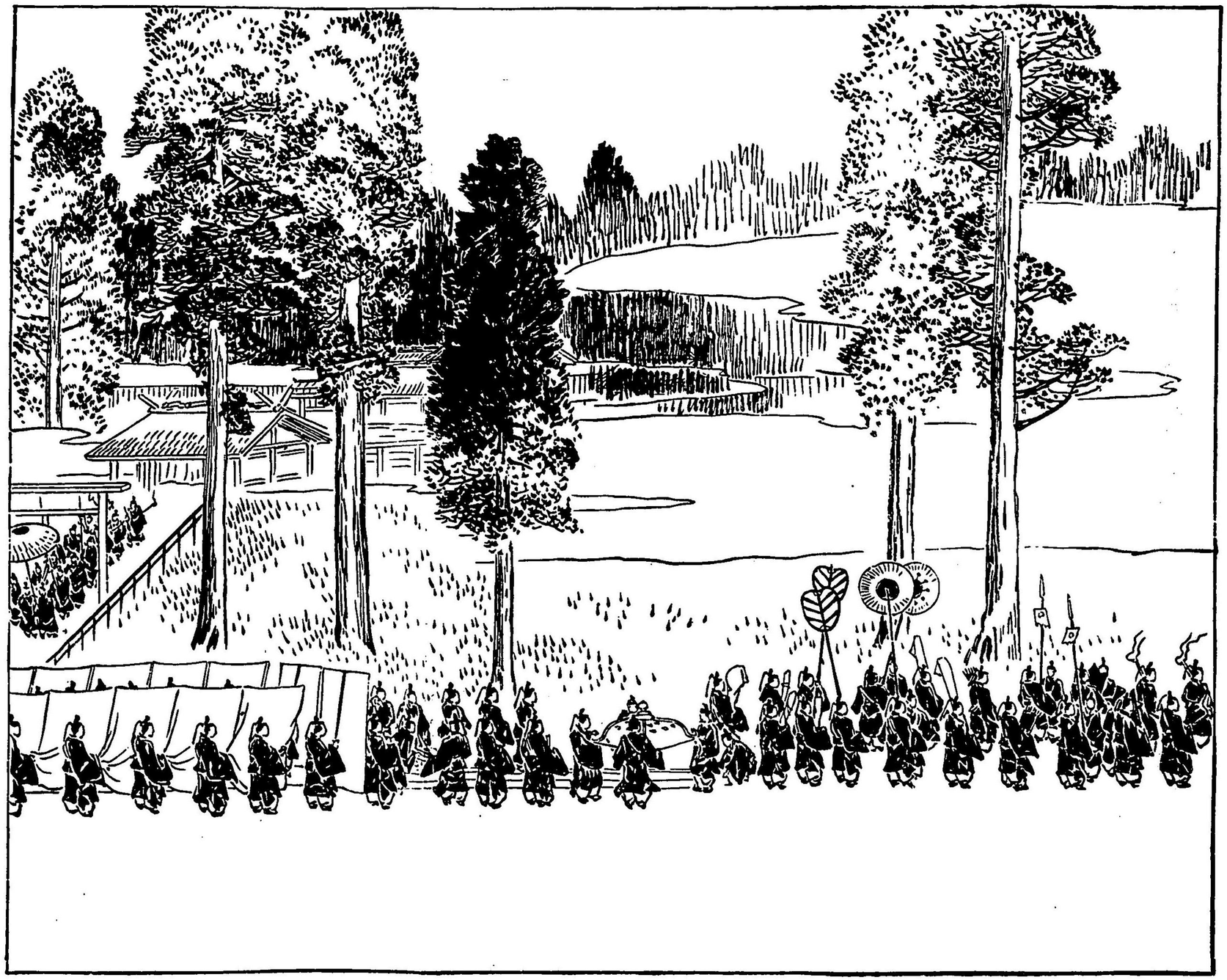
皇太神宮宮殿



感をなさしむ。新舊兩宮の板垣御門外階下の兩側には、爵位ある文武官、又は官國幣社の宮司等、今日の盛典を拜せんとて、謹みて控へ居るを見る。余等兩人は、

兎に角、庭燎の處々を檢分せんとて、先新殿へと進み、板垣御門より外玉垣御門に入る。常には、一般公衆茲にて參拜するなり。之を進めば、八重榊御鳥居あり。奏任官は茲迄進みて參拜するを得るなり。更に內玉垣御門あり、勅任官の參拜する所とす。之より、蕃垣御門・瑞垣御門を入れば、正殿あり。世に之を五十鈴宮、又は朝日宮と稱す。私に承る所によれば、陛下親しく御參拜の節すら、正殿の階下までには進ませられず、瑞垣御門と階下との間に設けられたる濱床に着かせらるゝのみとかや。然るに微臣何の幸ぞ、奉仕の爲とは云へ、正殿に咫尺して、高天原に千木の高知るを仰ぎ、底津磐根に宮柱の太知るを拜せんとは。恭しく殿前に稽首、許多度し、轉じて板垣東御門より舊殿に移り、正殿を拜すること前の如し。諸門前の兩側には、皆庭





燎を焚き、白丁孰も之に侍す。余等は舊正殿の左側の庭燎を督せんとて、其傍に踞坐しぬ。宮殿敷地内は、一面に小石敷き詰められ、全の石原にて、余をして、天安河原かと疑はしむ。

程なく、諸員内院に參入す。木履の音剝々たり。正殿に向ひて右には、西上して、黑袍を着けたる奉遷勅使岩倉掌典長・宮地掌典・綠袍の宮内屬・宮掌補を從へて、肅然として着坐し、左には東上して、祭主久邇宮多嘉王殿下、黑袍に明衣・木綿鬘を懸け、三室戸大宮司・桑原少宮司は、黑袍に、明衣・木綿鬘・木綿褌を懸け、禰宜權禰宜以下は、赤袍又は綠袍に、明衣・木綿鬘・木綿褌を懸けて、孰も凝然として着坐し、又其左に、東面南上して、權禰宜・宮掌幾十人となく、それ〴〵、赤袍・綠袍・黃袍の上に明衣を懸け、藹々として列坐し、其間に我儕の白丁雜色參差

したる様、天岩窟隱の昔、天安河原に、八百萬神の神集ひに集ひしも、かくやと思はれて、覺ず嚴然襟を正し容を改めしむ。と、見る間に、岩倉勅使は、やをら身を起して、階下の版に進み、御祭文を奏し給ふ。宮掌補、傍より松明を捧げて明を採る。萬籟死して、寂として聲なく、唯晰々たる庭燎の、時々ばち〳〵音するのみ。此間、諸員俯伏し、門外の儀仗兵も、亦捧銃奏樂して敬意を表す。神靈髣髴として來り享くるが如く、其齊嚴凡筆の得て汚すべき所にあらず。奏し終りて、勅使の復坐せらるゝや、三室戸大宮司・桑原少宮司、階上に昇り、御扉を開かる。其時きーと軋る一種異様の音、闇の寂莫を破りて、神苑内に響き渡れる、是亦森然たる思あらしむ。諸員俯伏し、儀仗兵捧銃奏樂をなす。扉を開き畢りて御鑰を大床に安じ復坐するや、續いて、權禰宜二人昇階して、殿内及び大床に點燈し、後大床の東西に分れて伺候す。祭主・大少宮司・稱宜の面々も、昇階して、同しく、殿内に伺候す。次に召立所役の權稱宜矢野善五郎、西面して階下の東方に卓立、其南に岩倉勅使・宮地掌典及び以下の權稱宜・宮掌等、一列に西面して卓立せられ、祭主宮は、一旦降階せられて、階下の西に、東面して卓立し給ふ。又行障・絹垣及び執物奉仕の權稱宜以下、孰も階下に進みて東西に分候す。余等此までは西の庭燎を監せしが、今は瑞垣御門の左側に蹲踞せり。

既にして、矢野權稱宜は、崇重の調もて、召立文を一々讀上ぐれば、諸員之れに應じ、手袋して、前陳執物を受け、行障及絹垣奉仕の權稱宜・宮掌は、左右各一員つゝ、順次大床に參昇し、一拜し終りて、階下に

分候す。後陣執物を受くること前の如く、行障絹垣を奉仕すれば、瑞垣御門の左側に控へたる宮掌補御巫清生氏は、檜扇にて、三度冠を叩き、鶏の皷翼く音を摸して、「カケコー・カケコー・カケコー。」と、喈々たる鶏鳴を唱ふること三回、音詞清爽、冷然として常夜の寂莫を劈きぬ。これ、天岩窟前に、當世の長鳴鳥を鳴かしめし故事を襲ひし者なるべし。此時、岩倉奉遷使は、恭しく階下に進み、出御を奏請する事三度、權稱宜御幌を褰げ、大少宮司・稱宜等、神儀を奉戴して、内院を出で、御階を下り、絹垣の内に入らせ給ひ、神儀彌〻出御となる。時に八時四十分、忽にして、門下に控へたる樂師、笛・篠・篳・和琴の道樂を奏す。其音翕如として、嘹喨、余韻空中に澄み渡りて、嫋々たり。殊にそよとだに枝を動す風もなく、行く雲も止る靜けき眞夜中、踞坐するは、これ高天原か、天安河原か。夜氣凜々として、凄冽人を襲ひ、神代ながらの杉檜挺然天に沖して、其高、際涯なく、目に入るは、白木造の神々しき宮殿と、衣冠束帶の、黒に、緑に、黄に、赤に、或は、雜色の白に、木履を石原に鳴らして歩するあるのみ。見る者、總て此世の者ならず。神儀の出御せらるゝ時、不圖目を擧ぐれば、十八夜の居待月、神路山を出で、新宮の樹間に懸りて、皎々として清く輝けるなど、得も云はれぬ風情なり。嗚呼かゝる莊重典雅なる威儀、世界孰れにかある。昔衣冠束帶嚴然として控へたる、羅馬の元老院議員に向ては、兜傲なる「ガリ」人も暴威を加ふること能はざりきとや。若、此盛儀を、自稱文明國と誇れる歐米人士に拜せしめば、嗚呼夫れ如何の感をかなさむ。

さて、其行列の順序は、前陣には、左右に宮掌二員、先導し、其後に、宮

掌補四員、燭を乗り、火光煌々として、道路を照す。次に、宮掌・宮掌補等御楯二枚、御鉾二竿、御靫二腰、御弓二張、御翳二枚、紫御翳二枚、金銅造御太刀二腰、玉纏御太刀一腰、須加利御太刀一腰、御蓋一具を捧持して隨ふ。其後に、樂師、道樂を奏しつゝ隨ふ。次に、宮地掌典は、譬蹕を唱へ、岩倉奉遷使先導し奉り、其の後に、權禰宜行障を捧げ、續きて、權禰宜左右十員、純白の絹垣を掲げて徐行す。此中に、畏くも御神儀御坐すなり。三室戸大宮司・桑原少宮司・木野戸・檜垣・置鹽の三禰宜、覆面手袋を着け、錦綾の肩當を懸け、恭しく皇太神宮を奉戴し、山田・矢野慶光院の三禰宜は、東相殿神を、熊谷・田中・東の三禰宜は、西相殿神を奉戴して、同じく絹垣の中にあり。是より先き、宮掌は、正殿新舊の御道筋を、總て御道敷布にて敷き、神儀のみ此上を通御せらるゝなり。神儀に次ぎて、宮掌八人、御蓋一具を奉戴し、其後に、祭主宮多嘉王殿下、鞠躬如として供奉し給ひ、之に續きて、後陣には、宮掌・宮掌補、菅御笠二枚、御弓二張、御靫二腰、御鉾二竿、御楯二枚を捧持して隨行し、最後に、宮掌四員、松明を翳し、宮掌二員之に殿す。

此行列は、總て少くも百數十人以上に上り、微妙なる道樂に送られて、西の舊殿より、東の新殿に遷りますなり。暗夜に、絹垣の白く長きが、高き宮殿より、出御せられ、階下を降りて遷御せらるゝ樣は、宛も神の髣髴として、高天原より天降りますかの感あり。神儀の石階に至るや、同處に控へたる儀仗兵、此一行の前後を護衛しつゝ、進行して、新宮の石階に到り、參道の左右に整列して、捧銃奏樂の禮を行ふ。

之よれ先き、舊殿の開扉せらるゝと同時に、禰宜及び權禰宜各二員、新殿に參進し、新宮の御扉を開き、殿內及び大床に點燈して、神儀の入御を待ち奉る。かくて莊重なる行列は、新宮に到着し、九時廿分に神儀安らけく平らけく、新殿に入御し給ふ。先づ祭主宮殿下は、昇階して殿內に入り、召立所役の權禰宜は、階下の東方に卓立して、執物の召立文を續み上ぐれば、前陣後陣の神寶を、次第に階上の禰宜に薦む。禰宜は之を殿內に奉納す。唯、御鉾四竿、御弓四張、御楯四枚は、大床御戸脇左右御壁持の上に寄せ奉る。供奉の諸員各版に着き、祭主宮も降階、權禰宜は燈を撤して降階、大少宮司は、扉を閉ぢ、孰も降階して版に着く。此間諸員俯伏、儀仗兵は捧銃奏樂す。後岩倉勅使以下、階下の版に進み、御祭文を奏す。其儀前の如く、諸員俯伏、兵士の捧銃喇叭の吹奏例の如し。奏し終りて復坐すれば、三室戸大宮司は、勅使の前に到り、遷御式の終れる旨を告げ、大宮司は御鑰に封を施し、之を宮掌に授け、諸員は奉拜八度、拍手兩端して退出す。儀仗兵之が前後を護衛し、荒祭宮を遙拜す。儀仗兵は參道の南に整列して、捧銃の禮を施し、之にて全く二十年毎の盛典たる遷宮式を終り、諸員悉く退出せしは、午後十一時三十分。余等も、無事に奉仕の榮を荷へるを、互に祝しつゝ、關氏と相伴ひて旅宿に歸りぬ。かくて五日にも、無事に豐受神宮の正遷宮に奉仕す。其儀、內宮と殆同じければ、省きぬ。仄に承る所によれば、遷宮當日は、宮中にては、神嘉殿南庭に屋を設けられ、第八時に御出御の上、御遙拜遊ばされたりとかや。又、皇后陛下・皇太子殿下・同妃殿下も、御便宜の所にて、御遙拜遊されたりとは、

申さんもなか〳〵に畏し。

遷宮式終へて後、四日は、內宮に、六日は、外宮に詣でゝ、正式の參拜を願ひ出で、官位氏名を署したる上、神官に導かれ、兩宮共に、外玉垣西門より、八重榊御鳥居の前に進み、恭しく神靈を拜す。密に帳簿を拜し奉るに、九月廿七日、多嘉王と、太く筆を染められたるを見奉る。躬祭主ながらも、我々臣民同樣に、御署名の上、御參拜を遂げられたる、殿下敬虔の御心情、實に畏き次第にあらずや。

抑も、余の神宮を參拜せしは、茲に三回、第一回は、明治三十一年四月、未だ學生たりし時、第二回は、明治三十三年にして、臨時假宮に御坐しゝ時にて、第三回は、卽今年の御遷宮式に奉仕したるなり。而して、余が最も感激に堪へざるは、御一代に三回の御遷宮を行はせらるゝこと、史乘、未先例なき此盛典に遭遇せし事なり。申すも畏れあれど、今日の盛儀を語らん料に引かんに、足利氏の末、皇室の陵夷甚しく、大葬すらも擧げられず、僅に玉體を寶瓶に入れて、御殿の黑戶に置き奉りし事もありき。時の東宮は、十善の御身には、貧禍はなしと、白居易が作りしは僞なりと、嘆かれきとかや。かゝる折なれば、卽位の禮も行はれず、內裏も修復せられず、唯墻壁の荒れに任するのみ。されば、いかでか、神宮の頽圮など顧るに遑あるべき。事實、遷宮を行はざること、殆百二十有餘年。御一代に、一回だに、否三四代に、一回だに行はせられざる、勿躰なさよ。しかるに、明治の御代には、御一代に三回も御遷宮あらせらるゝとは、國史ありてより以來、未だ曾て有らざる御事にて、豈愛たき限ならずや。かゝる愛たき御遷宮に際

會し、躬親しく奉仕するの光榮を得たる、何の喜か之に如かん。更に嬉しきは、今回奉られし御神寶の、華麗絢爛なることなり。余嘗て二條離宮を拜觀せしことありき。流石、德川の全盛時代に經營せし、二條城の面影忍ばれて、唯々壯麗の感に驚殺せらるゝのみ。勅使間・遠侍間・大廣間・黑書院・白書院の諸室を、順次拜觀して、四襖金碧の燦爛たるに目を眩されしに、不圖各處の博風に、菊御紋章あるを、一見して、他の葵紋に比して、金色見劣りせるにより、之を案内の主殿寮吏に質しゝに、こは明治に至り、宮内省の所有に歸せしより、葵を菊に改めしが、皇室の經濟、一時に之を改むる能はず、唯一部の改鍍に止めしのみ。金色も亦德川氏のに敵する能はずとて、嘆息して語られしを、皇室の陵遲の事など思ひ出して、撫然たりし事もありき。然るに、今回奉らるゝ御神寶を、内務省にて内々拜觀せしに、其の美盡し、善盡し、壯麗華絢言語に絶す。殊に、玉纒御太刀の如き、七寶燦爛、人目を眩ましむ。更に、出發後、神苑會にて、撤下の御神寶を拜觀せしに、其粗撲なる、之を今回のに比して、實に天壤の差あるを見、衷心喜悅の情に堪へざる者あり。維新以來、皇室の尊嚴は、痛加り、日清、日露の兩大戰に、領土を南北に擴張して、皇威は益發揚せり、而して今日の神寶の美麗なるは、實に是れ、皇室の隆昌を示せる者にして、二條城拜觀當時を追懷して、愉快の念禁ずる能はざるなり。聞く神寶の材料は、殆日本全土より之を採られしと、例令ば、矢の鷲羽は、北海道より、朱塗の顏料は、琉球より之を求めしが如き、結局、日本國民全般より、國民の大祖先にまします、天照大神に、御神寶を獻りし觀あり。豈愛

たき限ならずや。

夫れ、大神宮の御靈は鏡にて、神代の昔、石凝姥命の鑄る所、天祖「爾之を視まさん事、朕を視るが如くせよ。」と、宣せ給へり。神誥深遠にして、叨に窺ひ知る能はざれども、大古、鏡の物を映ずる、洵に靈異の感なくんばあらず。若、人之に對せば、顏容立に現ず。されど、これ我にして、我にあらず、我父なり。誰が之に對して、油然として、敬愛の情湧かざるを得んや。されば、鏡には父祖の靈宿り、鏡卽父祖なりと謂ふも敢て不可なきが如し。これ、天祖の朕を視るが如くせよと、宣らせられ、列聖同牀共殿、敢て寸時も玉躰を離し給はざる所以にあらずや。唯世降り神威を瀆さんを恐れ、崇神天皇の朝、之を宮中より遷して、遂に五十鈴川上に鎭坐する事となれり。爾來、歴世尊崇渝る事なし。

天子、假初にも、伊勢の方に背かせ給はず。毎年の政治始に、先、第一に神宮御無事の由を奏上するや、天皇直立して敬聽せらるゝを例とす。これ、先づ神祇を祭りて、後に政事を議するの國俗に遵ふ者なり。されば、國家の大事、皇室の吉兆、假令ば、宣戰・講和・卽位・成婚の如き、必先神宮に報奏す。特に今上陛下に至りては、神祇を尊崇せらるゝこと最厚きは、國民の感激に堪へざる所なり。聞く、日露戰役後、平和克復を、祖宗の神靈に告げ參らせん爲め、三十八年十一月十七日、大神宮に御參拜あらせらるるや、陸軍大元帥の御正裝にて、外玉垣御門下にて修祓を受けられ、蕃垣御門外にて御手水、瑞垣御門に入御、御脫帽の上、階下なる祭舍の中央の濱床に、御直立の上、御祭文を奉讀せられ、御玉串を捧げて、御拜あらせらる。其御謹虔の御容躰、畏多か

りし由に申し承る。此時、扈從の侍從長は、唯瑞垣御門内に侍せるのみにて、伏見宮は瑞垣御門外に、參謀總長以下は内玉垣御門外にて陪拜せられしと洩れ聞く。又皇太子殿下も、御成婚奉告・戰捷奉賽の爲に、御參拜あらせらるるや。神宮にては、皇太子殿下を、陛下に準じ參らせ御座を正殿階下に設けられんとせしに、何時しか、陛下の御叡聞に達し、「殿下は、瑞垣御門に入御なるに及ぶまじ」。との御一言にて、御入御なかりきとも洩れ承る。如何に、陛下の、神宮に對し奉りて、誠懇なるかを察するに足らん。これ、卽祖先に對する大孝なり。嗚呼國民たるもの、陛下の大御心を以て心とし、其父祖に對せば、以て人子たるの義を盡くすを得べし。申すも畏けれど、陛下には教育に關する勅語を躬行實踐せさせ給へる者なり。されば、今回臨時祭主の命を拜せられたる多嘉王殿下の如き、五日の參籠を續けさせ給ひ、御遷宮當日の如き、全く晝餉を廢して深更まで奉仕せられ、其翌日は、又早朝より奉幣式に仕へ奉られし如き、皆陛下の御思召を躰せられしにて、誠に畏多き事と拜せられたり。

恭しく惟みるに、寶祚の隆えまさんこと、天壤と共に窮りなきの神誥は、今猶嚴として國史に炳に、三種の神器は、神代ながらに今に傳り、國威は八紘に發揚して、御稜威は年と共に隆なり。嗚呼、かゝる聖世に生れ、有史以來、未曾て有らざる、御一代第三回の正遷宮に仕へ奉りし微臣は、感激して涙に咽ぶあるのみ。余や微賤螻蟻に等しと雖、身國史を專攻して育英を任とし、萬國に比なき、國體の尊嚴、列聖名臣の治蹟を述べ、以て未來の國民をして、此三千載光輝ある國

史をして、益其光輝を發揚せしめんことを期して夙夜常に懈らず、今面御遷宮の盛典を拜して、光榮身に餘り、當時の感想を記し奉ると云爾。

鷄鳴三唱日神移　儀仗堂々雅樂隨　何幸微臣參盛典
人間還見降臨時。　奉仕　皇太神遷宮
古杉老檜欝相連　仰見新宮屹聳天　恭漱伊川親拜廟
祖神如在更寅虔。　拜　皇太神

明治四十二年十月廿日　佐藤小吉

神風や五十鈴の川の宮柱幾千代住めと建てはじめけむ　藤原俊成

附錄 終

此微々たる小冊子の卷頭を飾るに、諸大家の揮毫歌文を以てするを得たるは、著者の頗光榮とする所なり。而して裝釘の表に、伊勢內宮內殿御裝束赤地錦の織文を取り、裏に外宮御裝束刺車錦被を摸せるは、聊か微衷の存するものなくんばあらず。又、本書の內容に就きては、三上博士・紀俊・八田三喜・尾崎八束・深澤鏸吉の諸師友は、特別の助力を與へられたり。さて本書は、文字以外に古代風俗の一班を知らしめん爲に、挿畫を高橋松亭氏に囑し、故實家關保之助氏の指導を受けたりしが、氏は日英博覽會出品用務の爲、一校を試みたる後、渡英の途に上られしは、頗遺憾とする所なり。又高成田忠風氏は、終始校正の責に任ぜられたり。今本書成るに臨み、如上の諸人士に對し、滿腔の感謝を奉す。

明治四十三年神武天皇祭日於千朶樓上　佐藤小吉

族必奉氏上
宗必祭祖神

德川光圀

明治四十三年五月三日印刷
明治四十三年五月六日發行

（神代物語奥附）
定價 金六拾錢

著作者 東京市本郷區千駄木林町百六十番地 佐藤小吉

發行兼印刷者 東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地 大日本圖書株式會社
右代表者 專務取締役 宮川保全

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地 大日本圖書株式會社
大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷 大日本圖書株式會社支社

發賣所 各府縣下特約販賣所

大日本圖書株式會社特約販賣所

北海道 村上南店。川南。蟹文舍。一二堂。富貴堂。東京府 丸善。林平。大倉。水野。育野。三友。内田。杉本。文林堂。北隆館。文星堂。中西屋。東京堂。文會堂。勉強堂。二松堂。松邑。東海堂。有隣堂。十字屋。森江。千葉縣 弘集堂。丸屋。勉強堂。新潟縣 北光社。高桑。覺張。野島。西村。萬松堂支店。目黒。埼玉縣 水野。高野。群馬縣 換乎堂。千葉縣 多田屋。茨城縣 明文堂。川又。寺田。栃木縣 換乎堂分舗。青木。三重縣 岩田。安屋。愛知縣 永東。川瀬。福岡縣 吉見。谷嶋屋。三原屋。大石。山梨縣 柳正堂。岐阜縣 郁文堂。郁文堂支店。長野縣 日新堂。水野堂。朝陽館。西澤。盛文堂。宮城縣 藤崎。英華堂 福島縣 甲斐山。滋賀縣 佐藤。文明堂。青森縣 育英堂。今泉。今泉支店。山形縣 盛文堂。牧野。八文字屋。秋田縣 蟹堂。東海林。藤島 富山縣 中田。學海堂。清明堂。栃木縣 若林。文港堂。松田。南波。大阪府 金川。柳原。小谷。松村。開成館。寶文館。三宅。北村。今井。植田。大分縣 熊谷。石田。福浦。竹内。瑞師寺。四村。中非。長野縣 松崎。奈良縣 文進堂。獻芳館。廣田。福井縣 品川。石川縣 宇都宮。島根縣 德岡。今井。久松堂。鳥取縣 安達。川岡。板倉。岡山縣 奥田。武内。廣島縣 積善館。芸香堂。原田。山口縣 含英堂。梅龍堂。日新堂。日新堂支店。超世館。和歌山縣 小安堂。德島縣 靜壽堂。香川縣 開益堂。開文舍。愛媛縣 向井。土肥。足立。阿部。藤原。高知縣 富士越。福岡縣 佐野。積善館。博文社。金文堂。大分縣 甲斐。中國。梅津。佐賀縣 牧川。平井。熊本縣 長崎。宮崎縣 修進堂。谷。鹿兒島縣 吉田。金光堂。沖縄縣 小澤。北海道 新高堂。

明治四十三年二月調

文學博士 那珂通世譯註（原本蒙古文）

成吉思汗實錄

菊判美裝全一冊
定價金參圓
郵税金拾弐錢

本書原本は蒙古語を以て記述したる元の太祖成吉思汗の實錄にして太祖存世の時其大部を撰り其子太宗の時增補大成したるものなり然るに本書の完本は殆ど散逸し去り轉寫せるものとを合せて天下僅に六本を傳ふるに過ぎず加ふるに蒙古語を解する學者古來殆ど絶無なりしを以て此大英雄の眞相も久しく世に現はれざりしが東洋史學の泰斗たる那珂博士自ら蒙古語を究め飜譯に註釋に刻苦精勵五箇年の星霜を費して成りしもの即本書なり是に於てか古今無双の大英雄の面目は躍如として世人の眼底に映ずるに至り曖昧模糊の裡に埋もれたりし蒙古の歴史は天日の雲霧を排して中天に輝くの觀あるに至れり史學研究者は勿論この大英雄の風采を想望し或は又博士が學界に遺したる無比なる大功献を知らんと欲する士は一本を坐右に備へずして可ならんや。

發行所 大日本圖書株式會社
電話新橋八四四・二七三
振替口座東京二一九番

文學博士物集高見編

修訂 日本文明史略

菊判美裝全一冊
定價金貳圓
郵稅金拾五錢

抑々本邦史籍其數多しと雖も大抵支那編史の體裁に倣ひたれば其記する所は政官の交替戰爭の勝敗及天變地異に止まりて世態人情に及ばず本書は即ち支那編史の體裁に倣はずして別に著者の考案を以て一種特異の體裁を剏め以て當時の現象即ち其代々に現出せる萬事萬物を公平に考察して人心の變遷風俗の推移及び邦國文明の進歩を記述せしものなり

發行所 電話新橋八四四・二七三 振替口座東京二一九番 大日本圖書株式會社

文學士 中村德五郎 著

日本開闢史

菊判美裝全一冊
定價金壹圓六拾錢
郵稅金八錢

本書は紀元前の國史にして十年間の研究と精細なる實地踏査との結果より成り古學者の泰斗たる本居宣長翁等の壘を摩し現代諸學者の論陣を拔き前代未聞の新發見と千歲不磨の卓說とに依り神代の雲霧を排きて天日を見るの感あり斯る未曾有の大著述を繙くは國民今日の最大急務にあらずや

發行所 電話新橋八四四・二七三 振替口座東京二一九番 大日本圖書株式會社

文學士 高桑駒吉著

印度五千年史

附錫崙島史

菊判美裝全一冊
定價 金貳圓
郵税 金拾貳錢

而積七十萬平方里を算し人口二億八千餘萬を有する彼れ印度は嘗て世界文明の源泉と仰がれ世界最新の學術を有し世界最玄の宗教を有したりき而して今や英國の版圖に歸し蠢々として其の願使に從ふに過ぎず之れが沿革と經路は歴史家にあらざるも見て鑑戒とすべきもの多きや論なし然るに今日に至るまで邦文を以て記述したる一の參考書すらなきは豈本邦學海の一大缺陷にあらずや高桑學士其の該博の智識を傾倒して茲に五百五十八頁の大冊を完成し印度五千年の史實歴々掌を指すが如し史家は以て印度史の根據となすべく經世家は以て治政の鑑戒とすべし

發行所 電話新橋八四四・二七三 振替口座東京二一九番 大日本圖書株式會社

文學士 高桑駒吉著

新撰

西洋通史（古代史）

菊判美裝全一冊
定價 金壹圓八拾錢
郵税 金貳拾錢

本書は著者が深大の抱負と卓絶せる史眼と該博なる學識とによりて著述せられたる大册子にして幾多の沒すべからざる特色を有す、今重なるもの五を紹介せむ、曰く古代のあらゆる典據を緯とし最新の研究を經として考證多岐に迷ふの弊をさけたり、曰く古代のあらゆる史的事實を網羅し興味津々たる叙述法により無味乾燥に流るゝの弊をさけたり、曰く法制經濟兩方面より觀察して一國の隆替興廢を詳論し社會發達の理法を明にせり、曰く正確なる典據に基ける精緻なる數十葉の地圖繪畫を搜入して了解記憶に便ならしめたり、蓋し邦文西洋史の白眉ならん

發行所 電話新橋八四四・二七三 振替口座東京二一九番 大日本圖書株式會社

中邨秋香著

落窪物語大成

和裝美本全四冊
定價 金壹圓八拾錢
郵稅 金拾錢

此物語は旨趣正くして面白く文章雄渾にして仔細に人情を穿てる等遙に他の物語に超え誠に平安文學の巧妙を味ひ得べき者なるが先生諸家の秘書に就き校訂し細註を頭書に掲げ俗譯を本文の傍に註し且評語をも下されたれば一讀親く先生の講義を聽くに等しき思あらん

發行所 電話新橋八四四・二七三 振替口座東京二一九番 大日本圖書株式會社

カーライル原著 土井晩翠譯

衣裳哲學

菊判美裝全一冊
定價 金壹圓參拾錢
郵稅 金八錢

本書はカーライルの作中第一傑出せるものにして英文學界唯一の奇書と稱せらる其一面は惡罵嘲笑たり其一面は滑稽諧謔たり其一面は慷慨悲憤たり其一面は文明史の一部たり其一面は教訓懲戒たり而して之を綜合して崇高なる一大哲學をなせもの本書即ち是なり吾人の視て以て獸毛布帛唯身を蔽ふに過ぎずとせる衣服其者より斯の如き驚天動地の大議論生出し來る天才以外絶對に企及する能はず

發行所 電話新橋八四四・二七三 振替口座東京二一九番 大日本圖書株式會社

沙翁全集

◎本集は抄譯に非ず梗概に非ず忠實親切なる完全譯也

第壹卷 ハムレット 戸澤姑射譯 定價金八十五錢 郵稅金八錢
第弐卷 ロメオ（エンド）ヂユリエット 戸澤姑射譯 定價金八十錢 郵稅金八錢
第參卷 ヴエニスの商人 淺野馮虛譯 定價金八十錢 郵稅金八錢
第四卷 オセロ 戸澤姑射譯 定價金八十五錢 郵稅金八錢
第五卷 リア王 戸澤姑射譯 定價金八十五錢 郵稅金八錢
第六卷 から騒ぎ 戸澤姑射譯 定價金八十五錢 郵稅金八錢

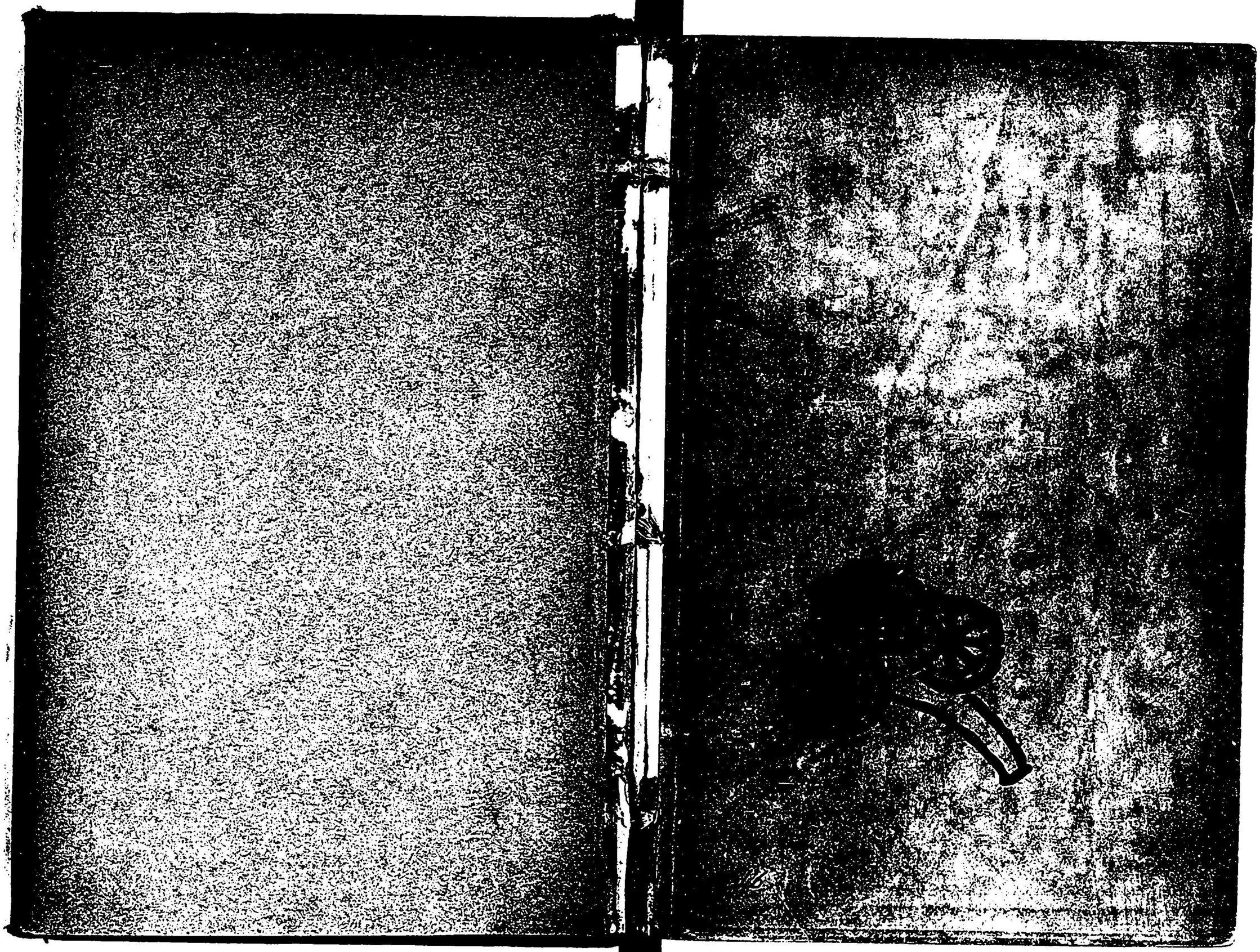
全部參拾七卷總頁約壹萬二千頁

戸澤姑射譯 **シーザー** ブルータスを始め幾多の勇士が羈馬末世の活舞臺に火花を散す偉觀に接しては如何なる讀者も卷を措く能はざるべし

馮虛譯 **御意のまゝ** 佛國の恬淡なる國主實弟の迫害を受けてアルデンの森に入り理想的の自由生活をなすアルデンの森には四組の戀物語ありて世界の春を描かれ愉絶快絶の一大喜劇として世既に定評あり

戸澤姑射譯 **行違物語** エジオンといふ商人二組の双生兒を養育しける折柄家族離散の不幸にあひ十餘年を經て父子主從圖らずも落合ひ錯雜紛糾幾多の喜劇悲劇目茶苦茶に亂出し偶然にも互に知合ひ名乘合ふ機會に遭遇し目出度々々にて大團圓となる

馮虛譯 **十二夜** 公爵家の若殿と伯爵家の令嬢と若殿の小姓と三人の戀ぎは宛も蛇と蛙と「なめくじ」の爭ひを現出し互に追追る内不思議の事より圓滿なる解決がつき芽出度打出しとなる

定價金九十錢 郵稅金八錢

發行所
大日本圖書株式會社
東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地